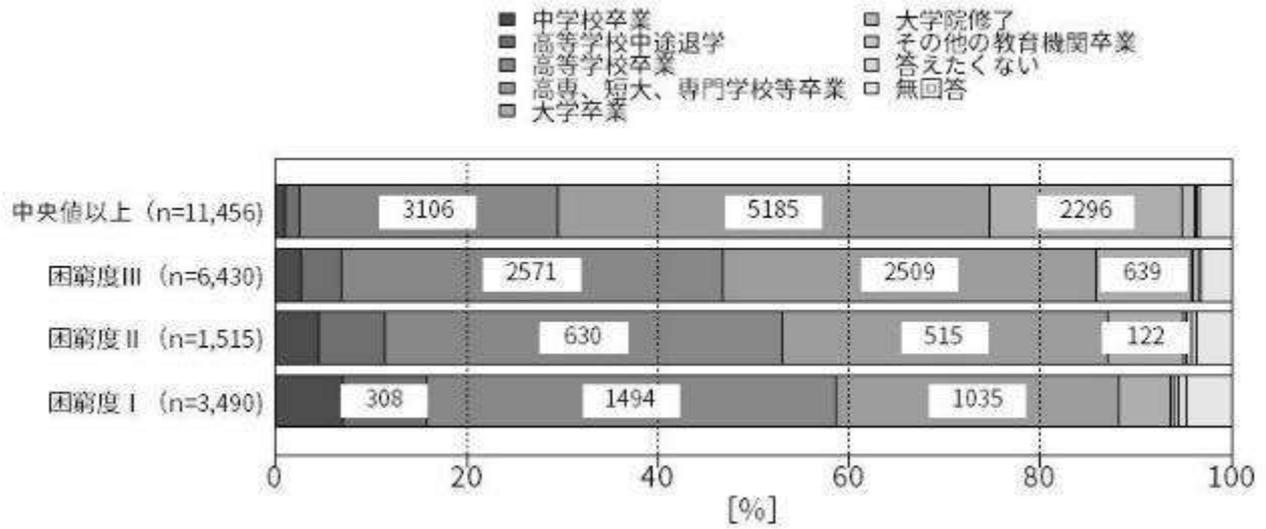


困窮度別に見た、母親の最終学歴（保護者票 問8）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

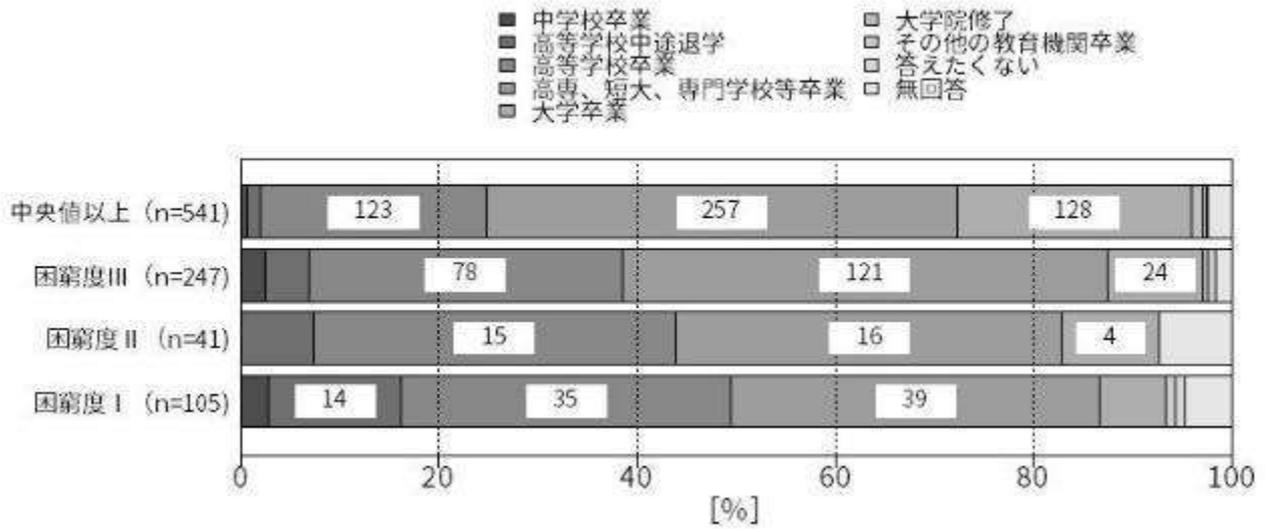
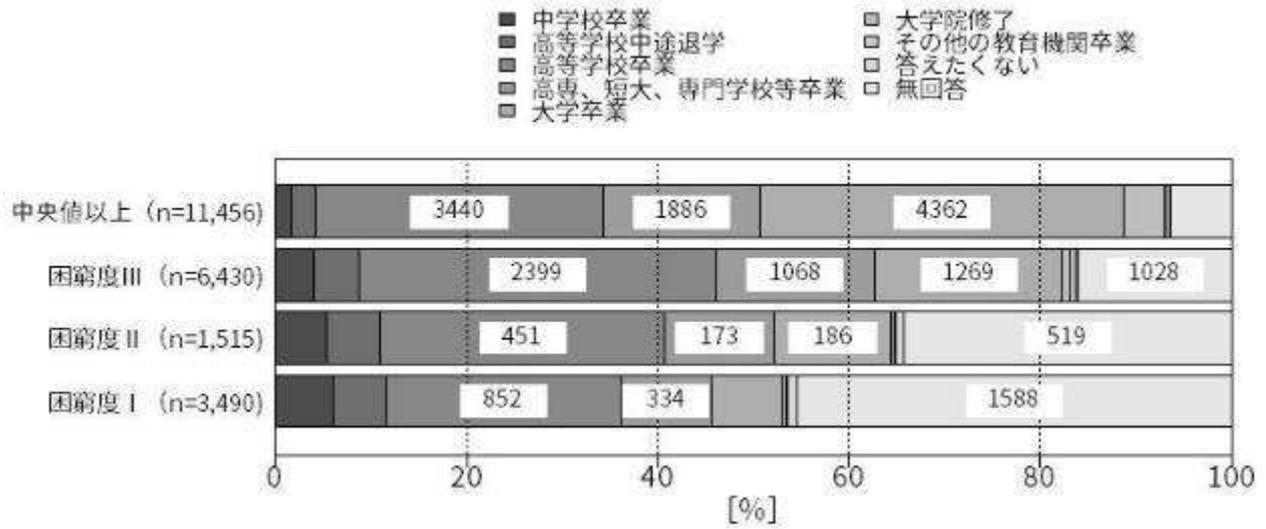


図 173. 困窮度別に見た、母親の最終学歴

困窮度別に母親の最終学歴を見ると、困窮度Ⅰ群の「中学校卒業」は2.9%、「高等学校中途退学」は13.3%、「高等学校卒業」の割合が33.3%であった。

困窮度別に見た、父親の最終学歴（保護者票 問8）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

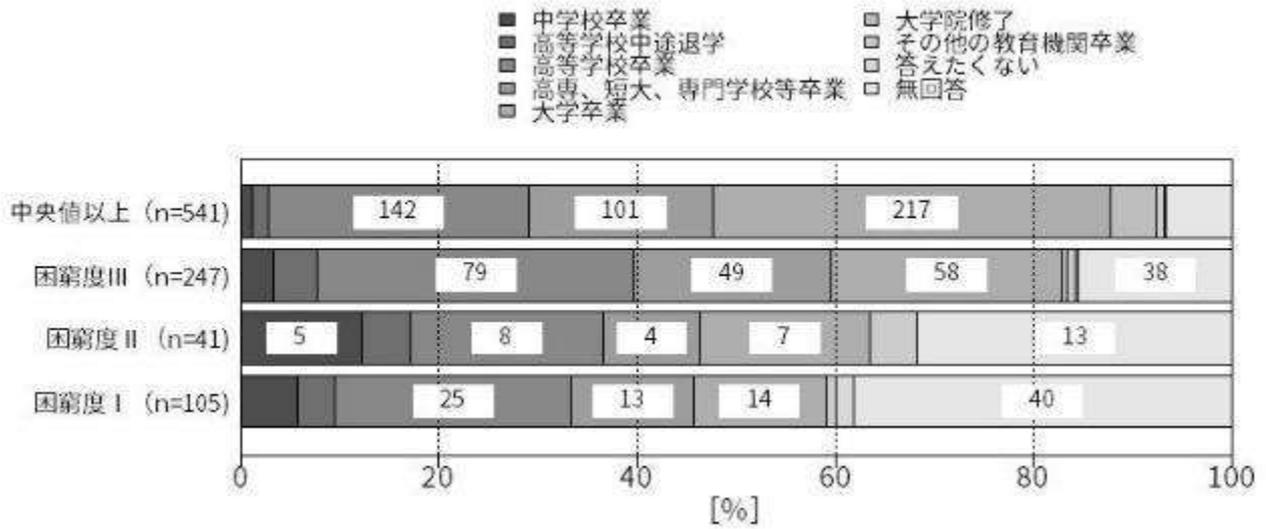
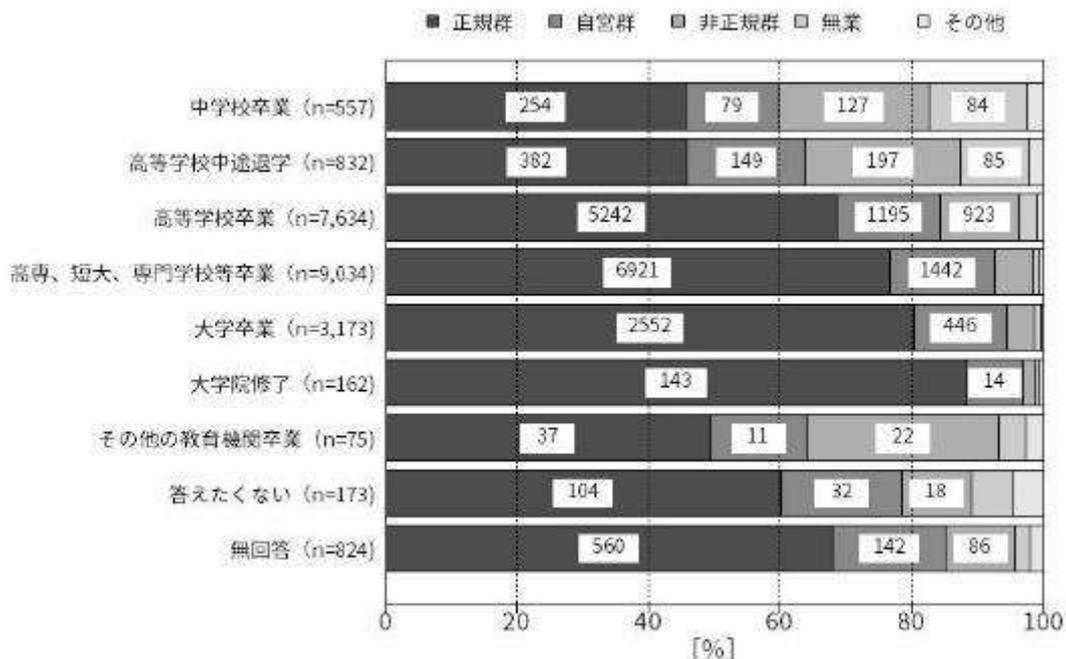


図 174. 困窮度別に見た、父親の最終学歴

困窮度別に父親の最終学歴を見ると困窮度Ⅰ群において、「中学校卒業」と「高等学校中途退学」の割合はそれぞれ 5.7%、3.8%であった。また、困窮度Ⅰ群では無回答の割合も高い（38.1%）。

母親の最終学歴別に見た、就労状況（保護者票 問8 × 保護者票 就労状況）

<大阪市24区>



<大阪市都島区>

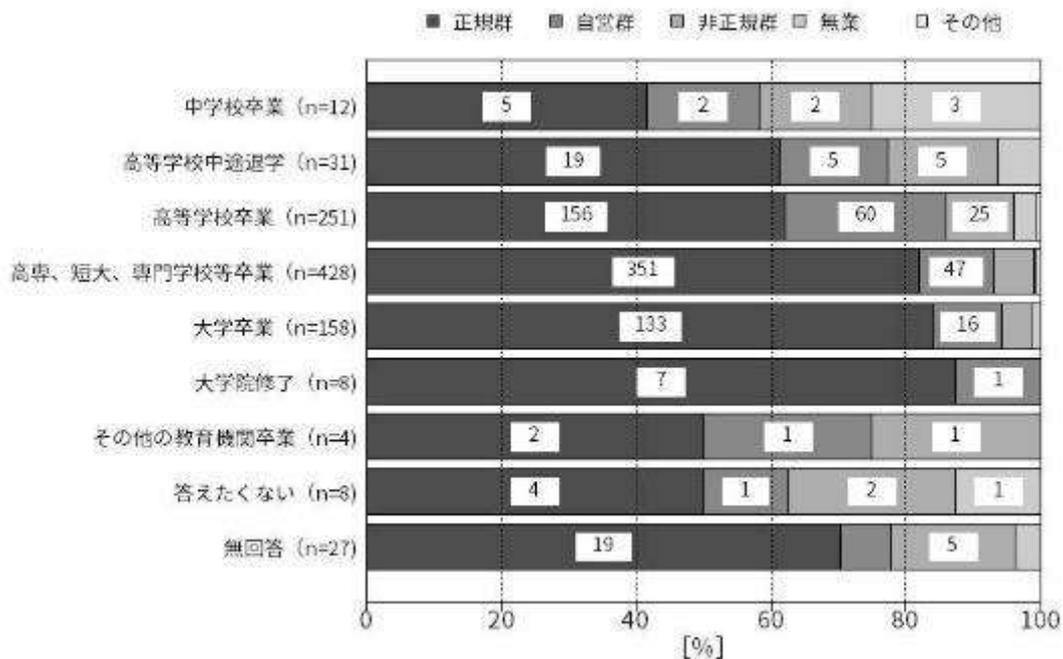
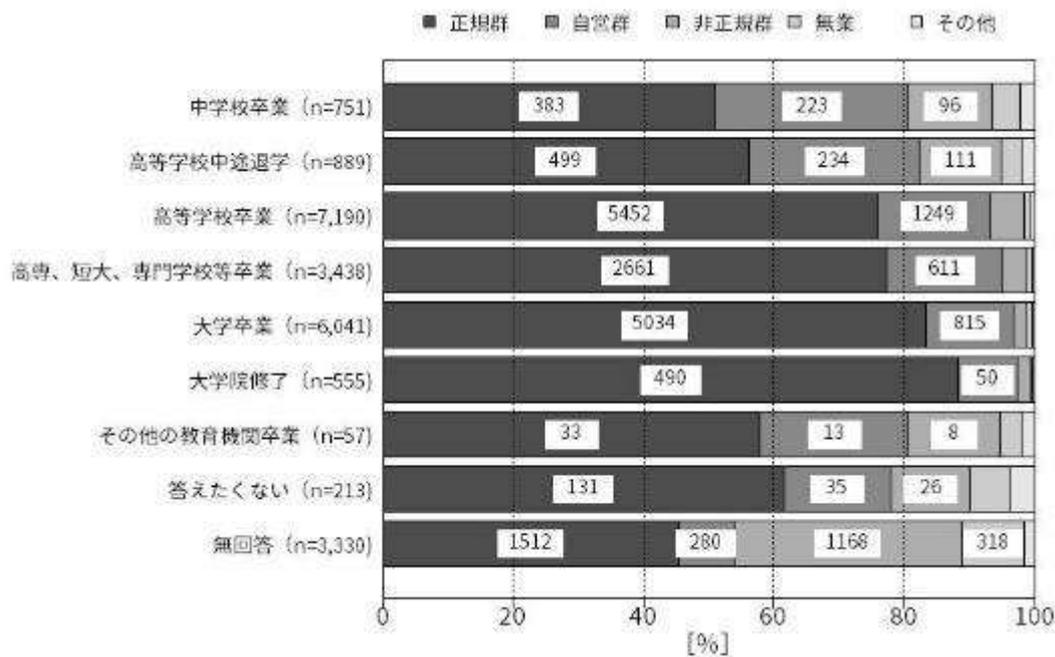


図 175. 母親の最終学歴別に見た、就労状況

母親の最終学歴別に就労状況を見ると、概ね、「母親の最終学歴」が高くなるにつれて「正規群」の割合が高くなる。

父親の最終学歴別に見た、就労状況（保護者票 問8 × 保護者票 就労状況）

<大阪市24区>



<大阪市都島区>

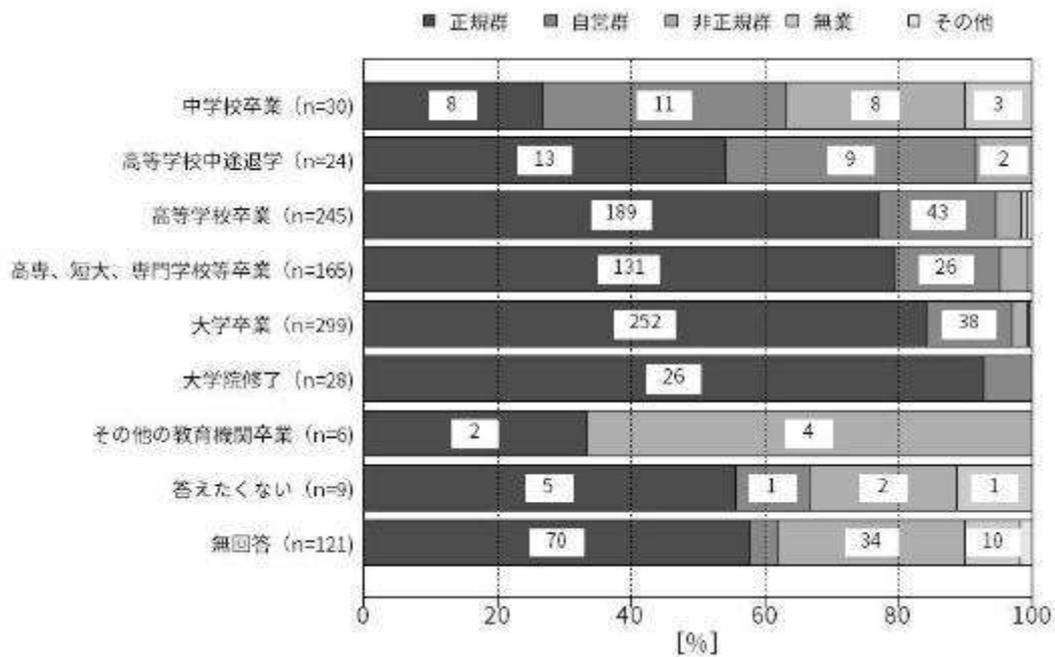
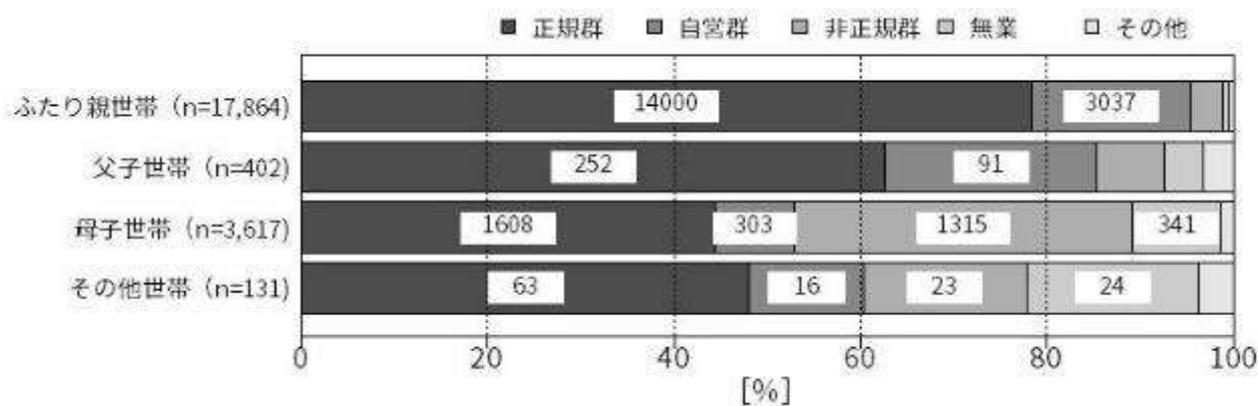


図 176. 父親の最終学歴別に見た、就労状況

父親の最終学歴別に就労状況を見ると、概ね、「父親の最終学歴」が高くなるにつれて「正規群」の割合が高くなる。

世帯構成別に見た、就労状況（保護者票 就労状況）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

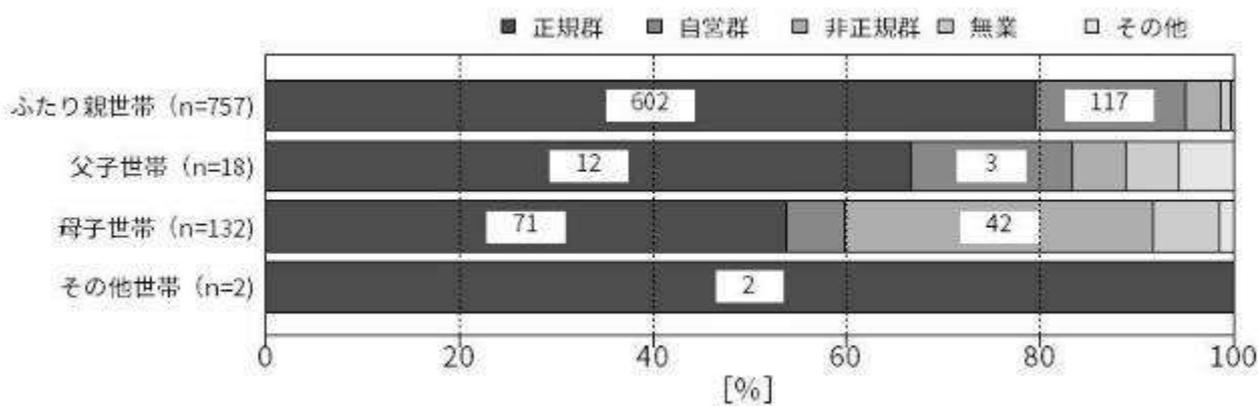
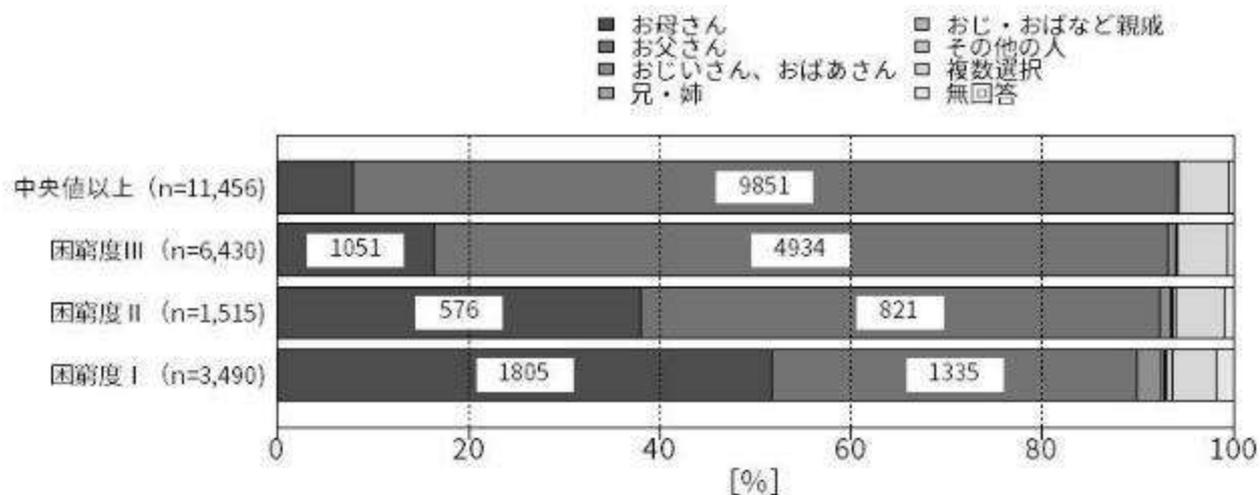


図 177. 世帯構成別に見た、就労状況

世帯構成別に就労状況を見ると、「ふたり親世帯」では「正規群」の割合が 79.5%であったが、「父子世帯」では 66.7%、「母子世帯」では 53.8%であった。「非正規群」は、「父子世帯」では 5.6%、「母子世帯」では 31.8%となっている。

困窮度別に見た、生計の支えとなる人（保護者票 問 30(2)）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

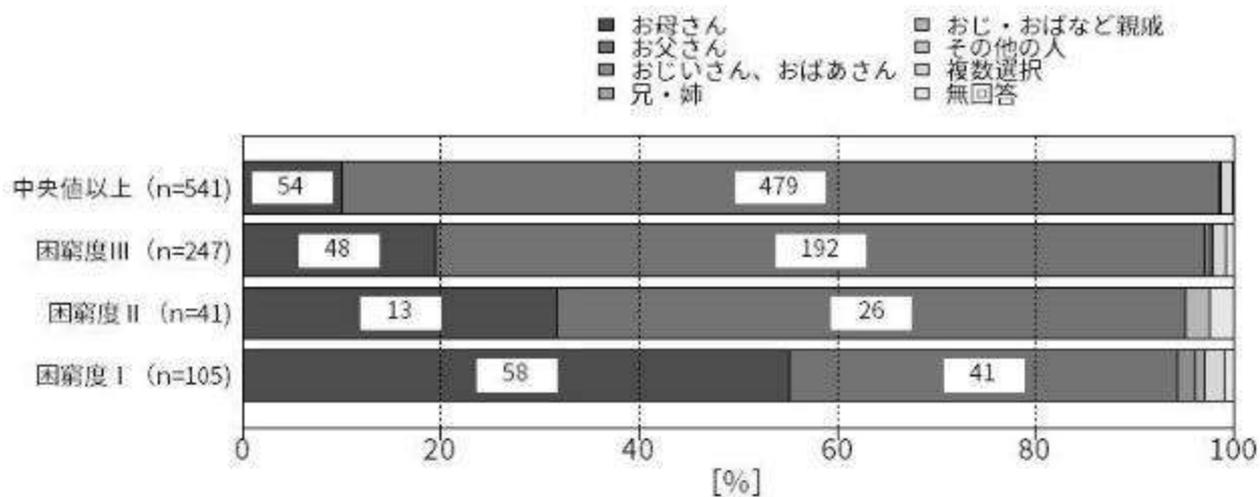
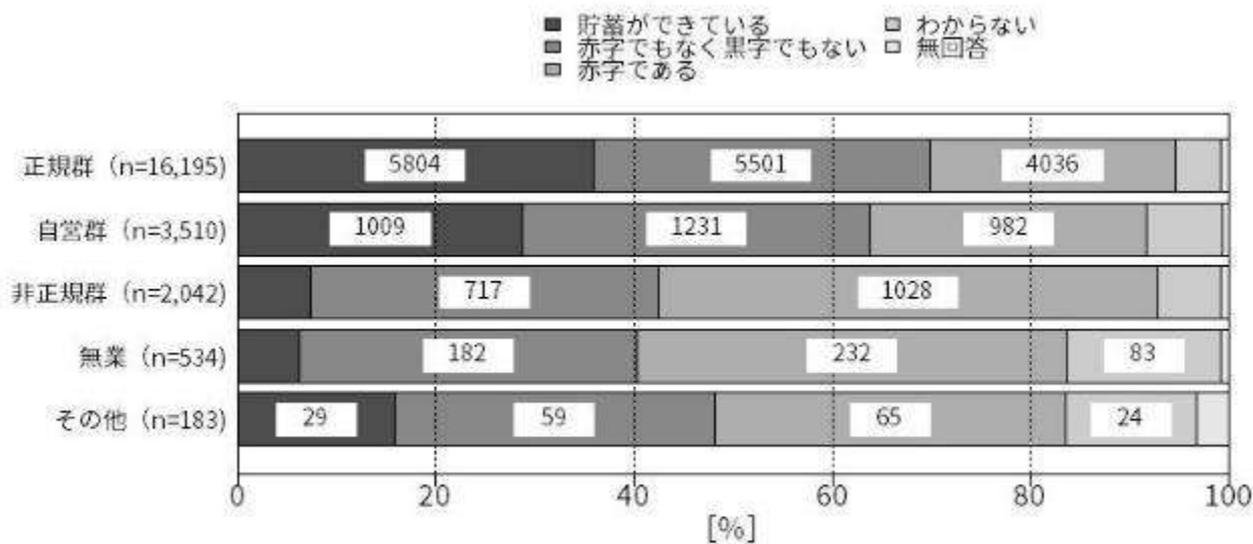


図 178. 困窮度別に見た、生計の支えとなる人

困窮度別に生計の支えとなる人を見ると、中央値以上群では「お父さん」という回答が 88.5%であった。困窮度が高まるにつれ、「お母さん」という回答が多くなる。困窮度Ⅱ群では「お母さん」という回答は 31.7%、困窮度Ⅰ群では 55.2%であった。

就労状況別に見た、家計状況（保護者票 問6(1)）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

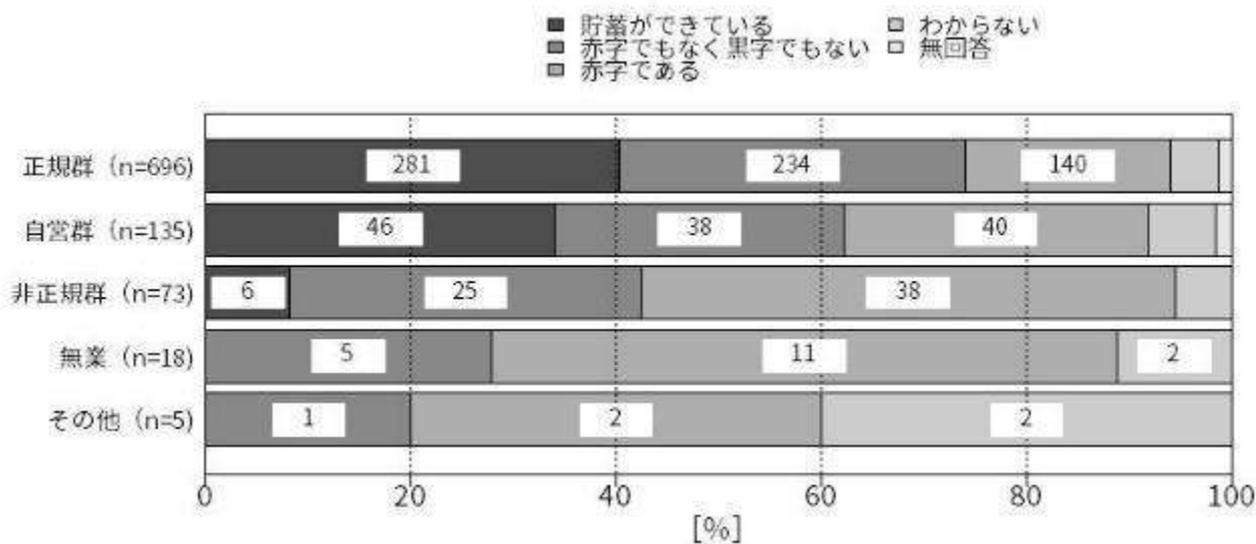


図 179. 就労状況別に見た、家計状況

就労状況別に家計状況を見ると、「正規群」・「自営群」では貯蓄ができていますの割合がそれぞれ、40.4%、34.1%であった。「非正規群」では「赤字である」と回答した人が 52.1%であった。「赤字でもなく黒字でもない」群に大きな差は見られない。

<雇用に関する考察>

本調査では、雇用形態が、所得階層の分布に反映されていることが示されている。すなわち、中央値以上の群では、正規雇用が 88.8%であったのに対して、困窮度Ⅰの群では 37.6%にとどまり、非正規雇用は 36.5%であった。なお、正規雇用であるにも関わらず、困窮度Ⅰの群になるという点は、いわゆるワーキングプアの問題として注意する必要がある。

また、困窮度が高い群ほど学歴が低い傾向にある。母親の学歴を見ると中央値以上の群では 23.7%が大学卒であるのに対して、困窮度Ⅰの群では 6.7%であった。父親の学歴を見ると、中央値以上の群では 40.1%が大学卒であるのに対して、困窮度Ⅰの群では 13.3%であった。困窮度Ⅰにおいて母親が中卒あるいは高校中退である割合は 16.2%であったのに対して、中央値以上の群では、中卒が 0.7%、高校中退が 1.3%であった。父親の場合は、中央値以上の群で中卒もしくは高校中退である割合は 2.8%であったのに対し、困窮度Ⅰの群ではそれぞれ 5.7%と 3.8%であった。学歴が高い群ほど正規雇用の割合が高くなる傾向もみられた。大学卒の場合、80%以上が正規雇用であった。

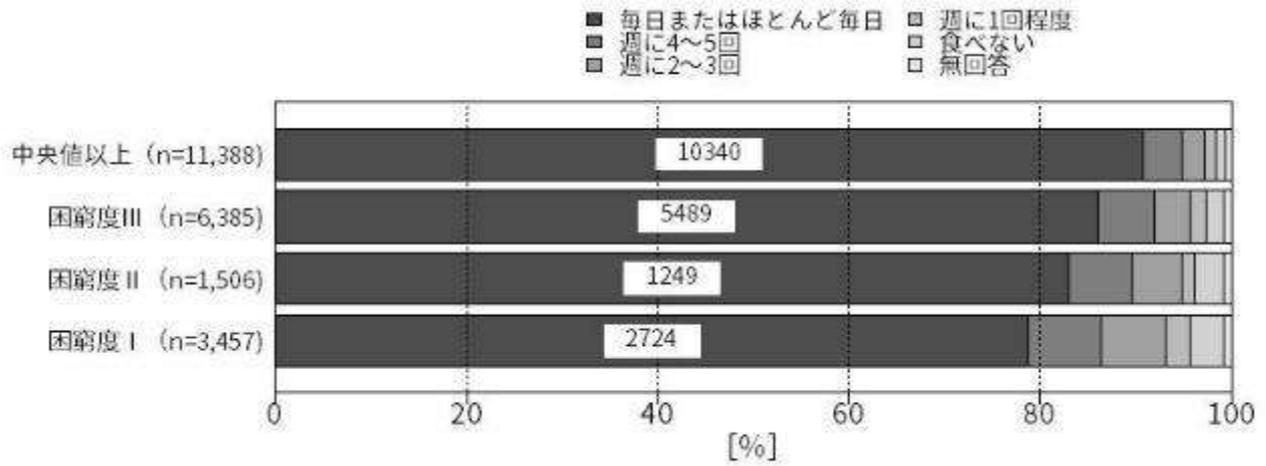
世帯構成と就労状況の関係を見ると、ふたり親世帯や父子世帯と比べて、母子世帯では非正規雇用の割合が高く、31.8%となっていた。困窮度Ⅰの群では、主たる生計維持者が母親である場合が 55.2%であった。

最後に、正規雇用である世帯の約 40%は、貯蓄ができるのに対し、非正規雇用の群ではその割合は 8.2%にとどまり、半数の世帯が赤字であると回答している。

3-3. 健康

困窮度別に見た、朝食の頻度（子ども票 問5(1)）

<大阪市24区>



<大阪市都島区>

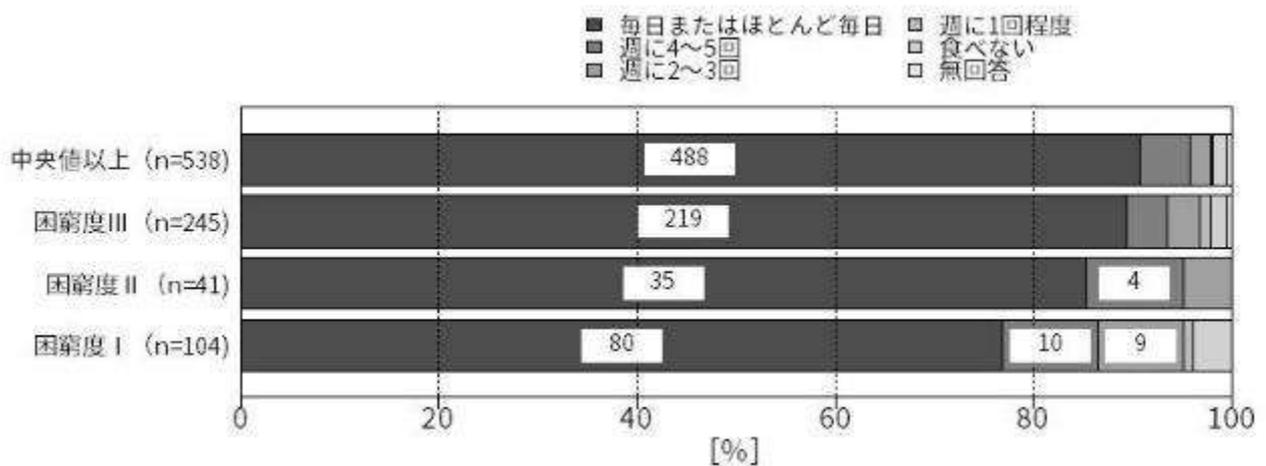
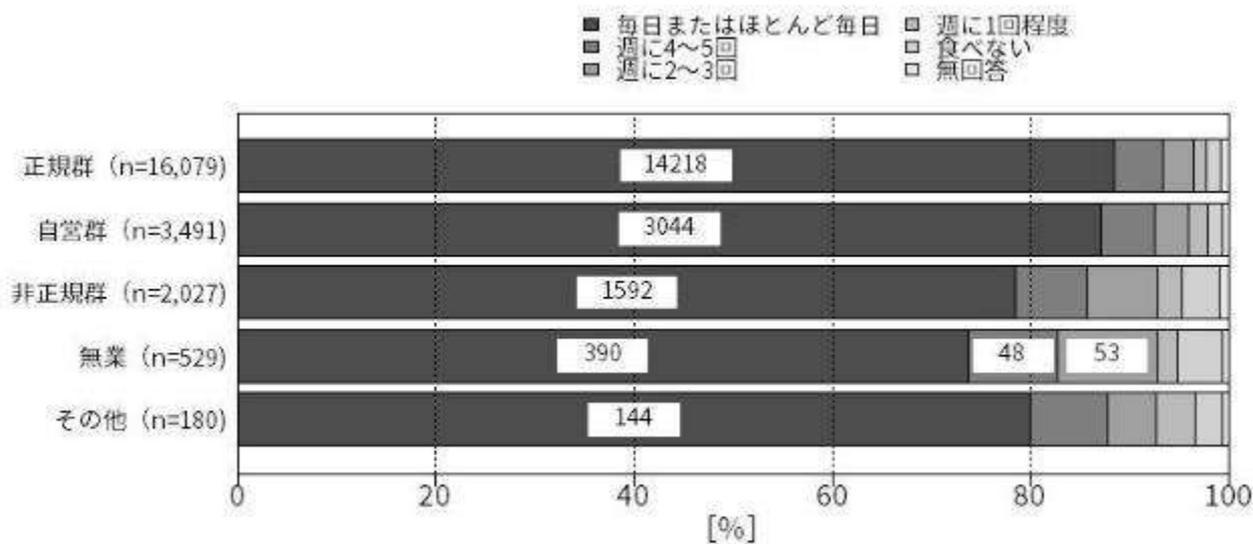


図 180. 困窮度別に見た、朝食の頻度

困窮度別に朝食の頻度を見ると、困窮度が高くなるにしたがって、「毎日またはほとんど毎日」朝食を食べる頻度が減る傾向が見られた。困窮度Ⅰ群では、約2割が「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていないと回答した。

就労状況別に見た、朝食の頻度（子ども票 問5(1)）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

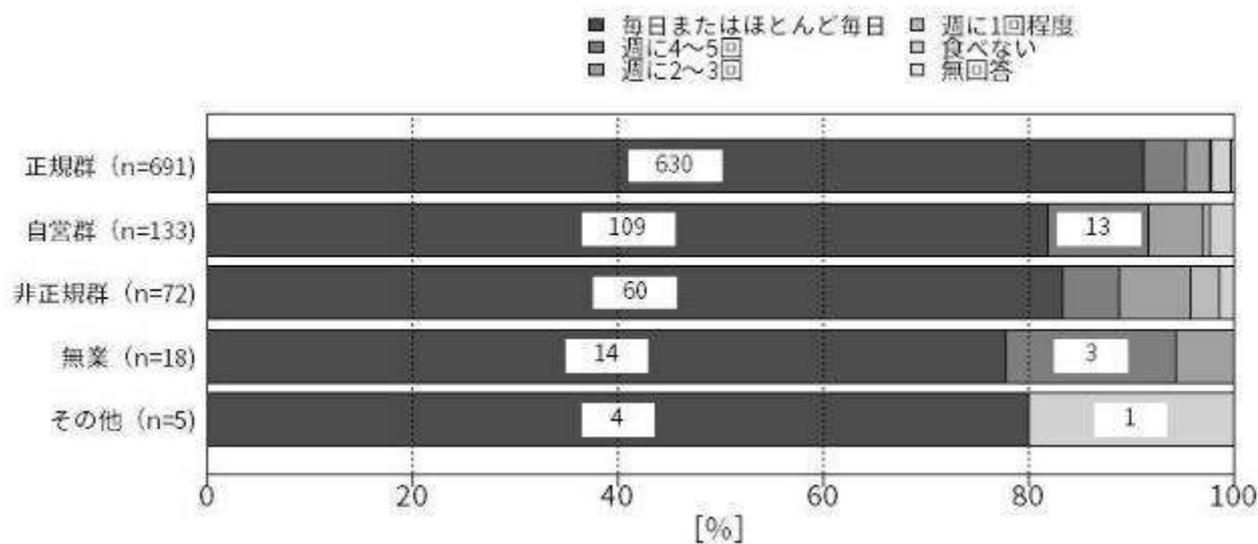


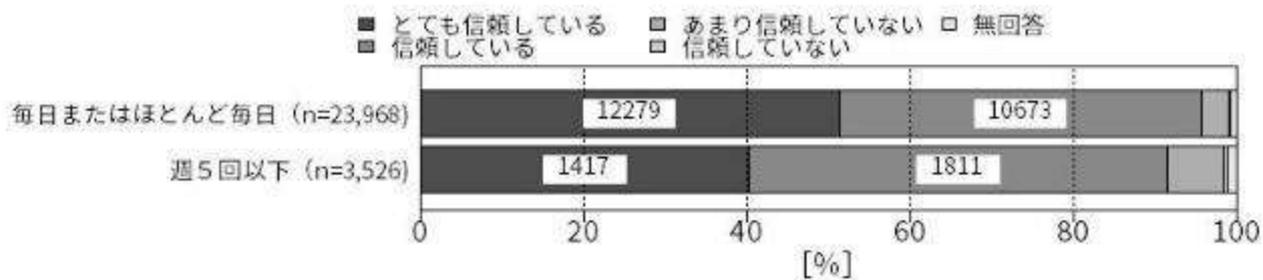
図 181. 就労状況別に見た、朝食の頻度

就労状況別に朝食の頻度を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる割合は、「正規群」で 91.2%、「自営群」で 82.0%、「非正規群」で 83.3%、「無業」で 77.8%、「その他」で 80.0%であった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）

（子ども票 問5(1) × 保護者票 問14(1)）

<大阪市24区>



<大阪市都島区>

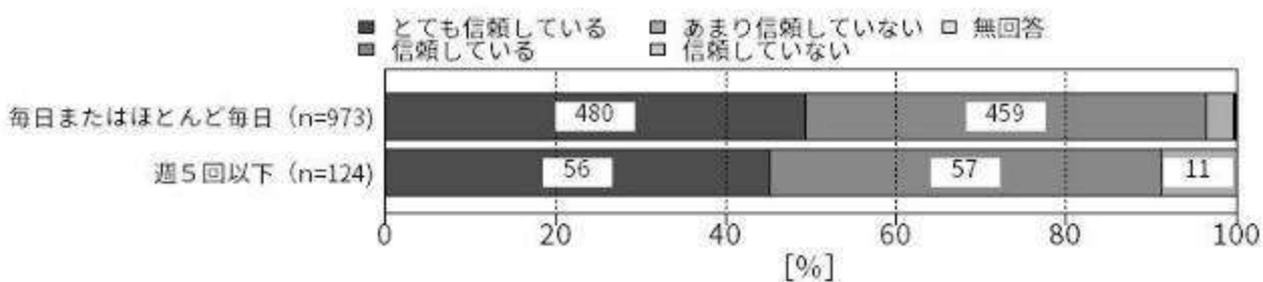


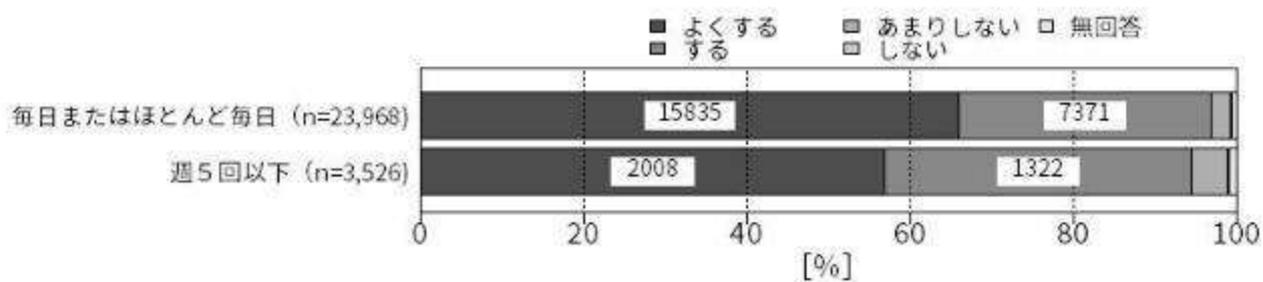
図 182. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、子どもを「とても信頼している」との回答が 49.3%であったのに対し、「週5回以下」では、「とても信頼している」と回答した人は 45.2%であった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）

（子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(2)）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

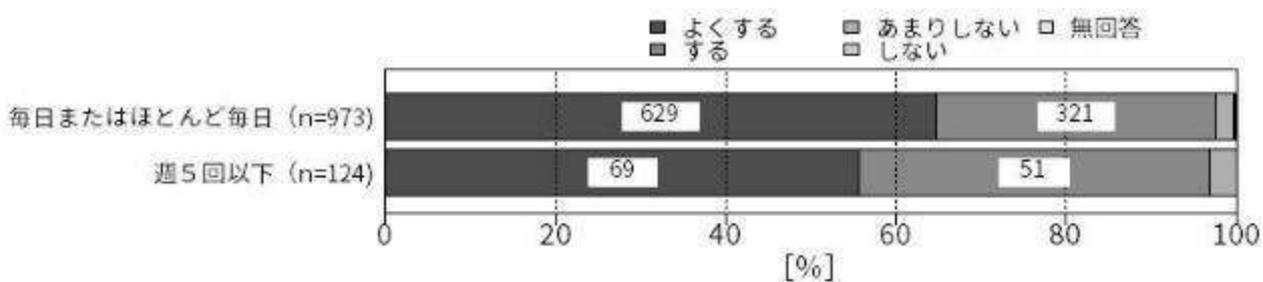
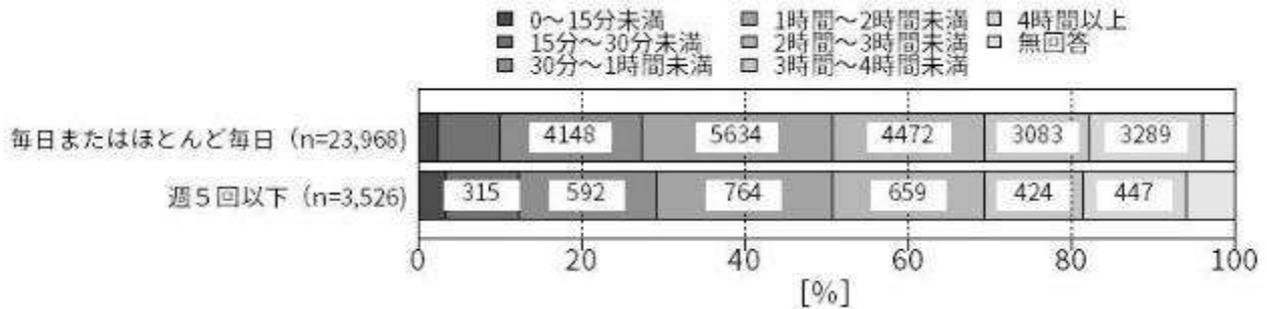


図 183. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと会話）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、子どもと「よく会話をする」との回答が 64.6%であり、「週5回以下」では、「よく会話をする」と回答した人は 55.6%

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））
 （子ども票 問5(1) × 保護者票 問14(3)）

<大阪市24区>



<大阪市都島区>

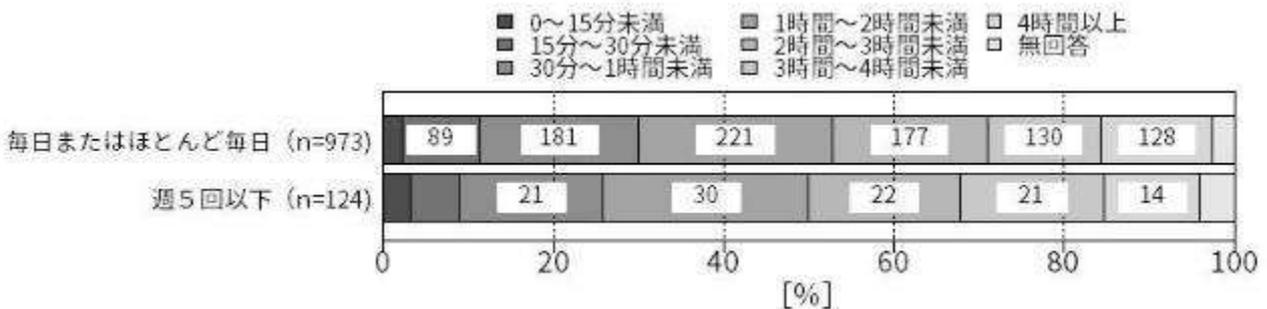
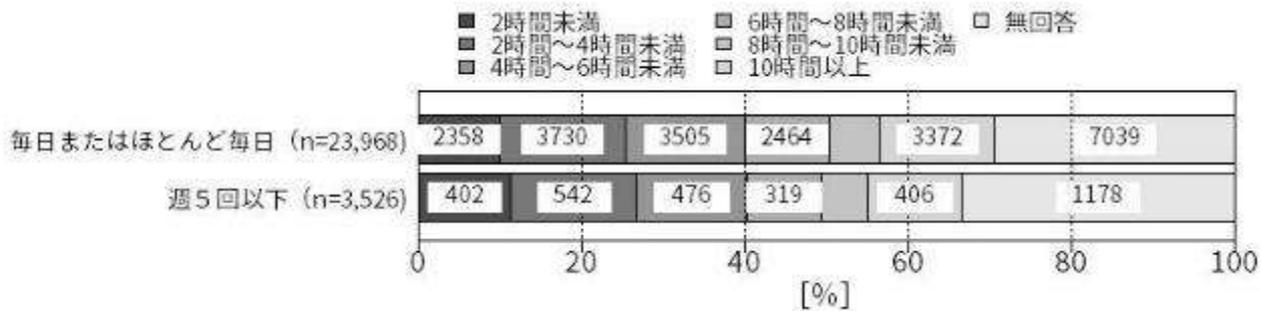


図 184. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり
 （子どもと一緒にいる時間（平日））

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人のほうが「週5回以下」の人よりも平日に子どもと一緒にいる時間が長くなっている傾向にある。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））
 （子ども票 問5(1) × 保護者票 問14(3)）

<大阪市24区>



<大阪市都島区>

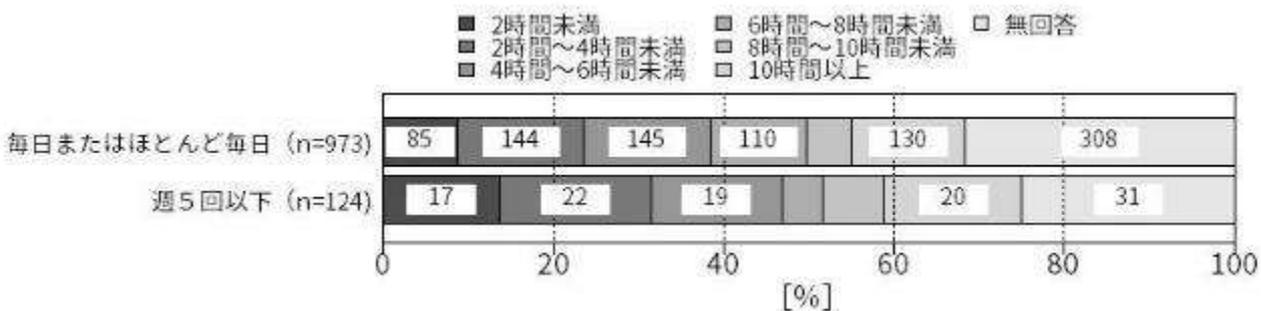


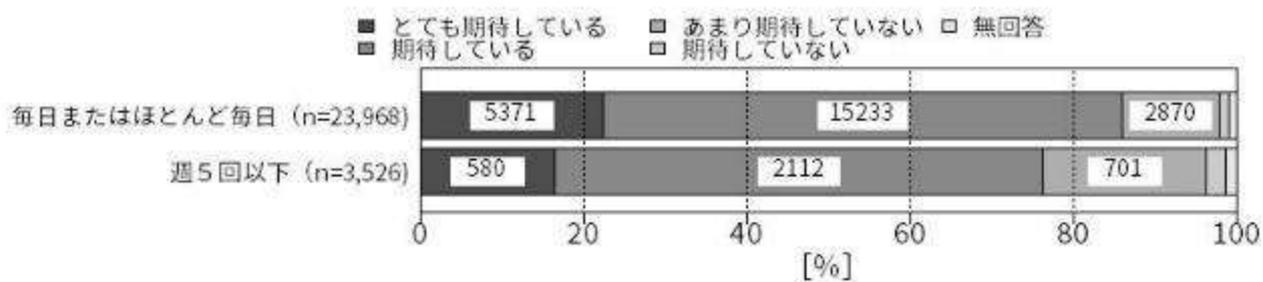
図 185. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり
 （子どもと一緒にいる時間（休日））

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人のほうが、「週5回以下」の人よりも休日に子どもと一緒にいる時間が長くなっている傾向にある。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）

（子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(4)）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

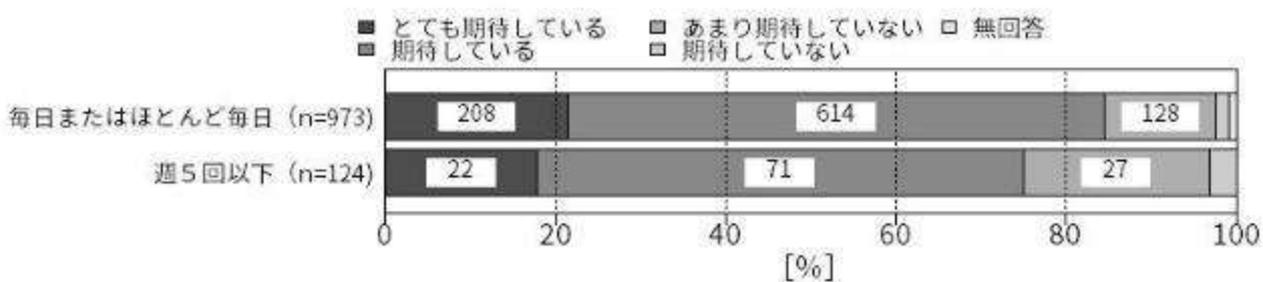


図 186. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）

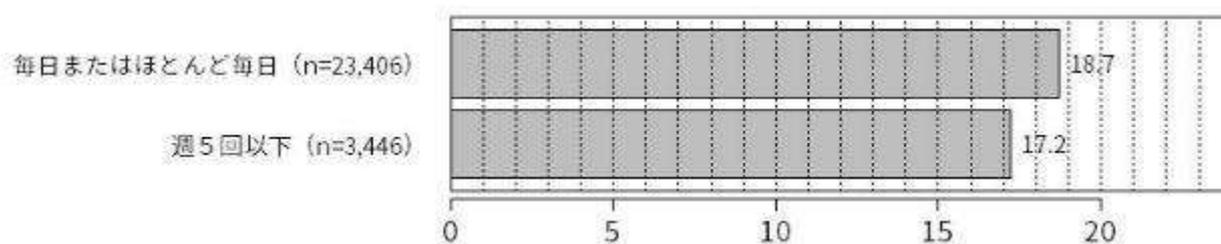
朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人では、「とても期待している」「期待している」をあわせて、84.5%であったのに対して、「週5回以下」の人では、「とても期待している」「期待している」と回答した人をあわせて75%であった。

朝食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

(子ども票 問 5(1) × 子ども票 問 26(1)～(6))

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 148 上の説明参照。

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

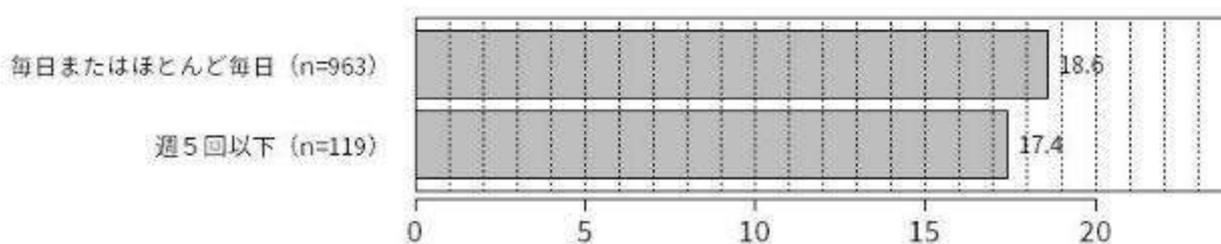
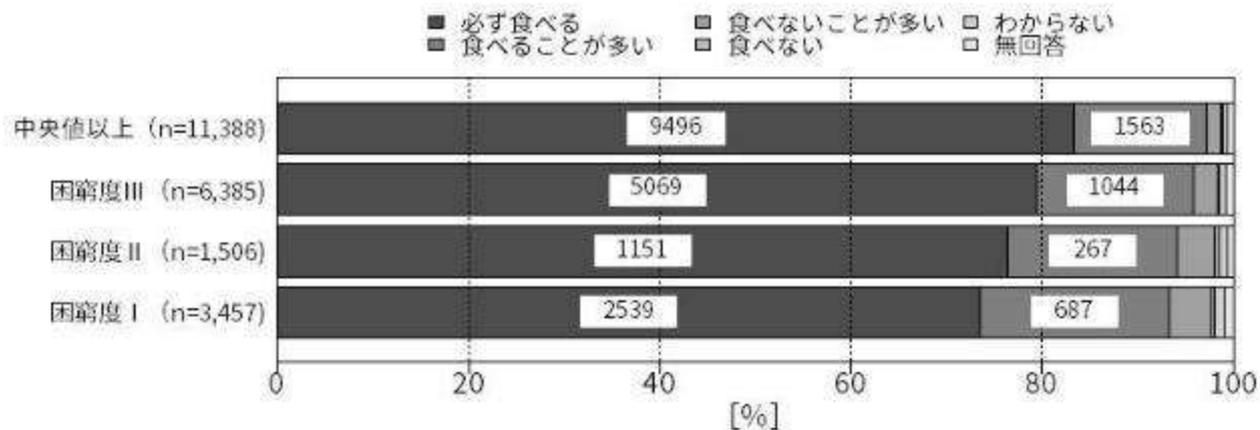


図 187. 朝食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

朝食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、18.6点であったのに対して、「週5回以下」では、17.4点であった。

困窮度別に見た、昼食の頻度（子ども票 問7）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

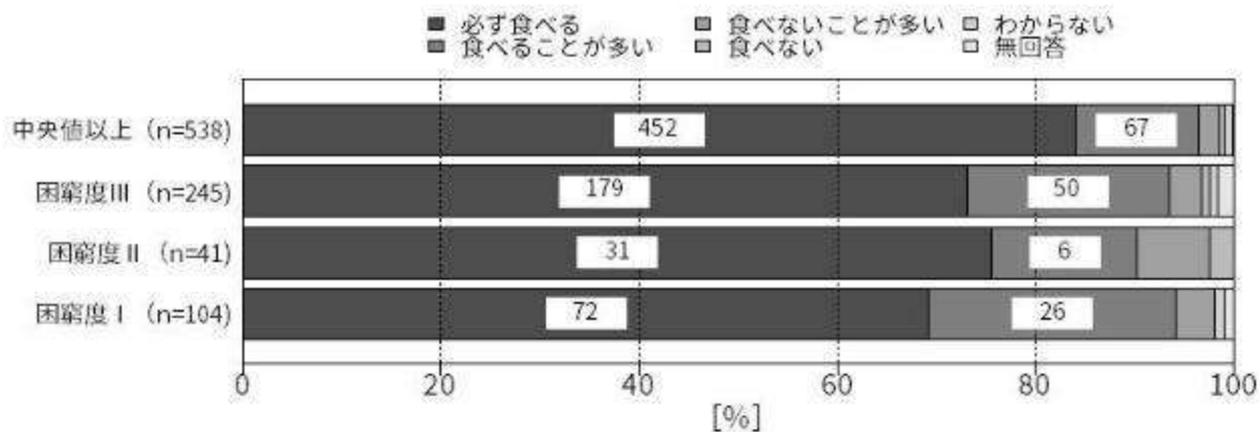
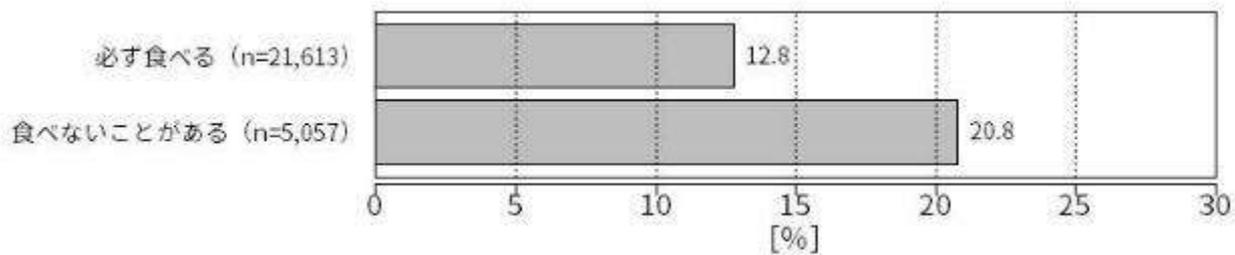


図 188. 困窮度別に見た、昼食の頻度

中央値以上群では、昼食を「必ず食べる」が 84.0%であるのに対し、困窮度Ⅱ群では 75.6%、困窮度Ⅰ群では 69.2%である。

昼食の頻度別に見た、相談相手のいない割合（子ども票 問7 × 子ども票 問22）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

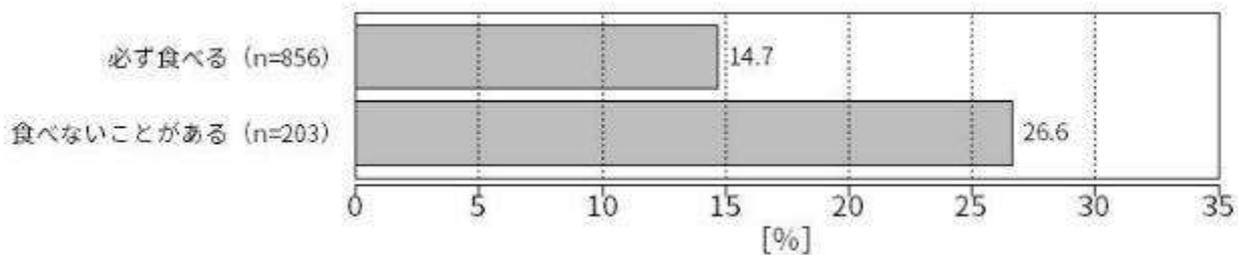


図 189. 昼食の頻度別に見た、相談相手のいない割合

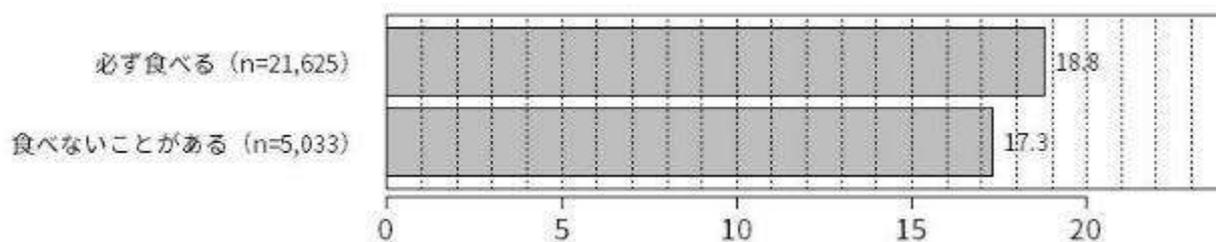
昼食を食べない群では、「相談しない」と答えた割合が 26.6%であった。

昼食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

(子ども票 問7 × 子ども票 問26(1)～(6))

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図148上の説明参照。

<大阪市24区>



<大阪市都島区>

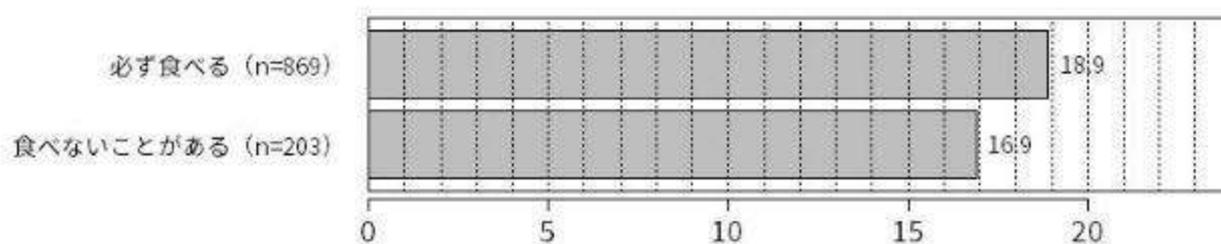
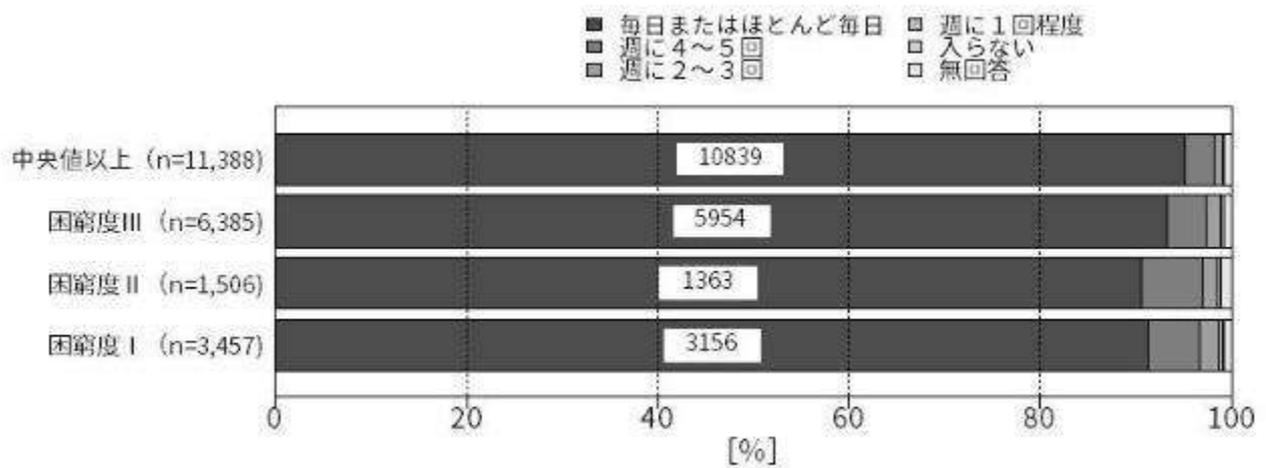


図190. 昼食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

休日の昼食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「必ず食べる」と回答した人の得点が18.9点であったのに対して、「食べないことがある」と回答した人は16.9点であった。

困窮度別に見た、入浴頻度（子ども票 問8）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

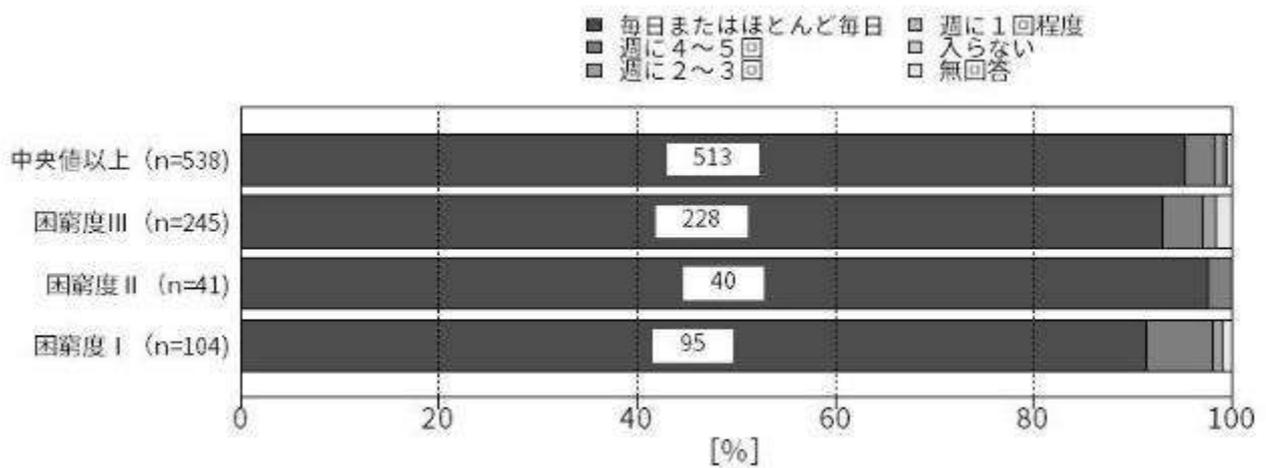
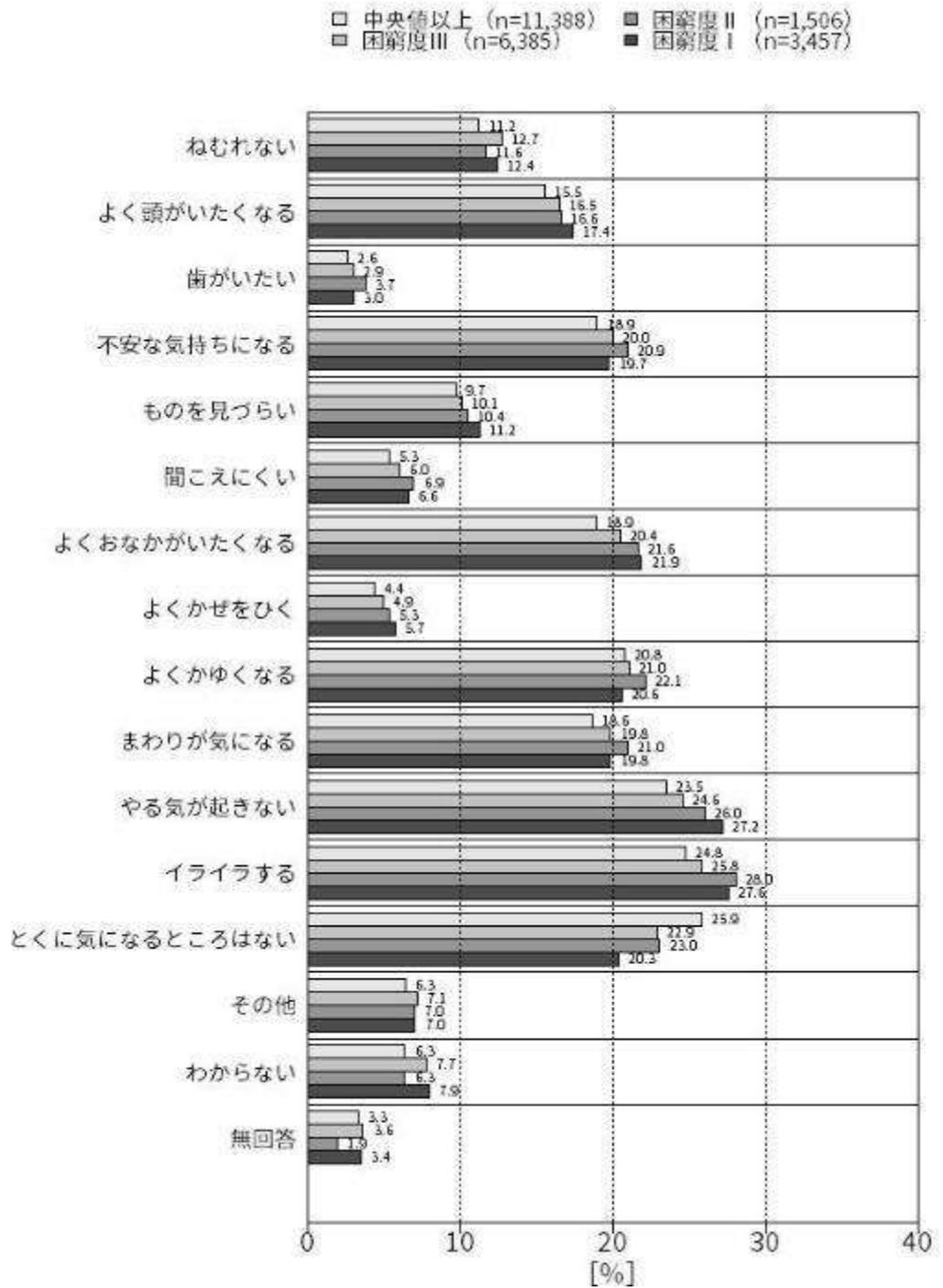


図 191. 困窮度別に見た、入浴頻度

困窮度別に入浴頻度を見ると「毎日またはほとんど毎日」と回答する割合は中央値以上群では95.4%、困窮度Ⅰ群では91.3%であった。

困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること（子ども票 問 24）

<大阪市 24 区>



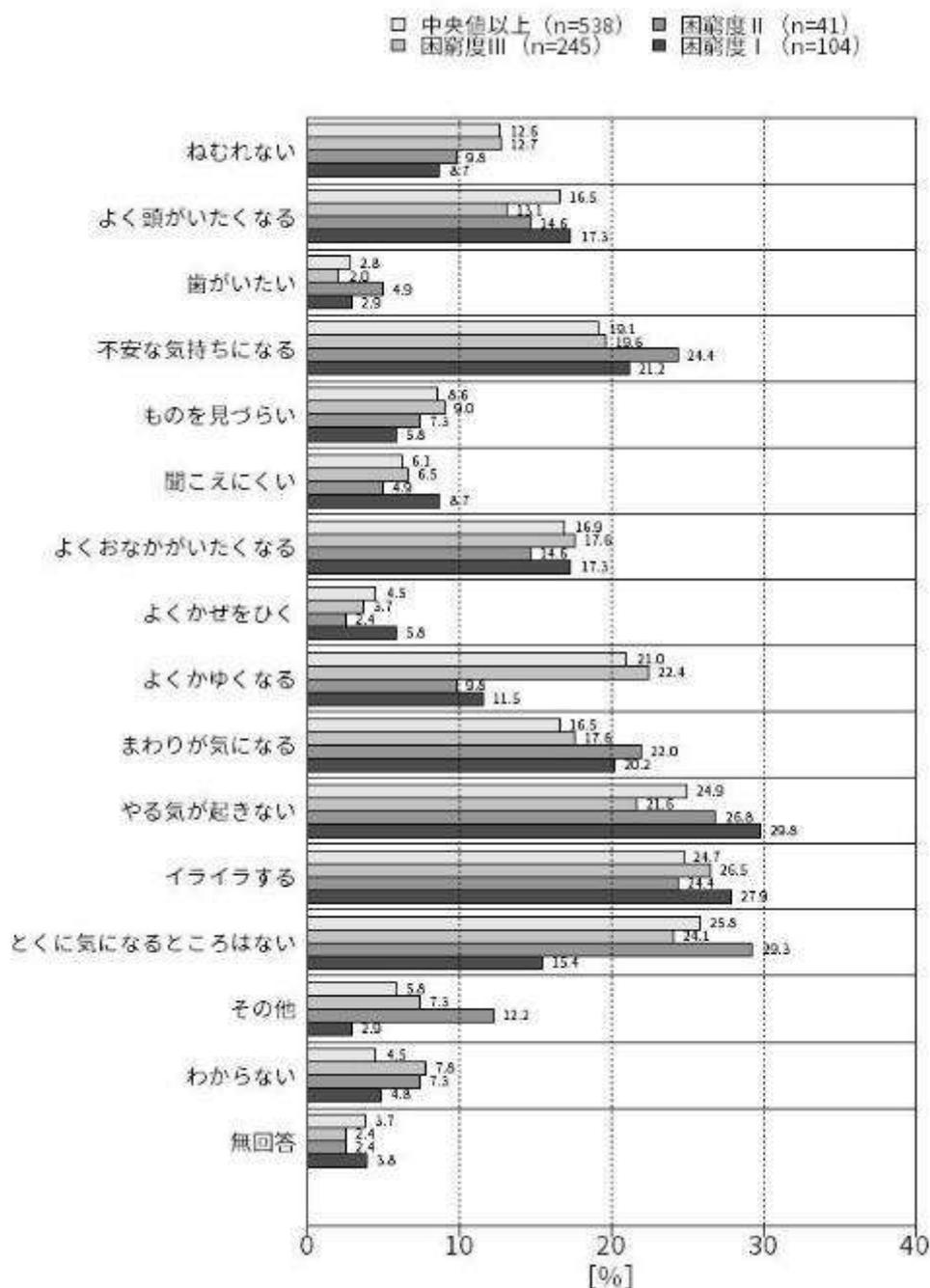


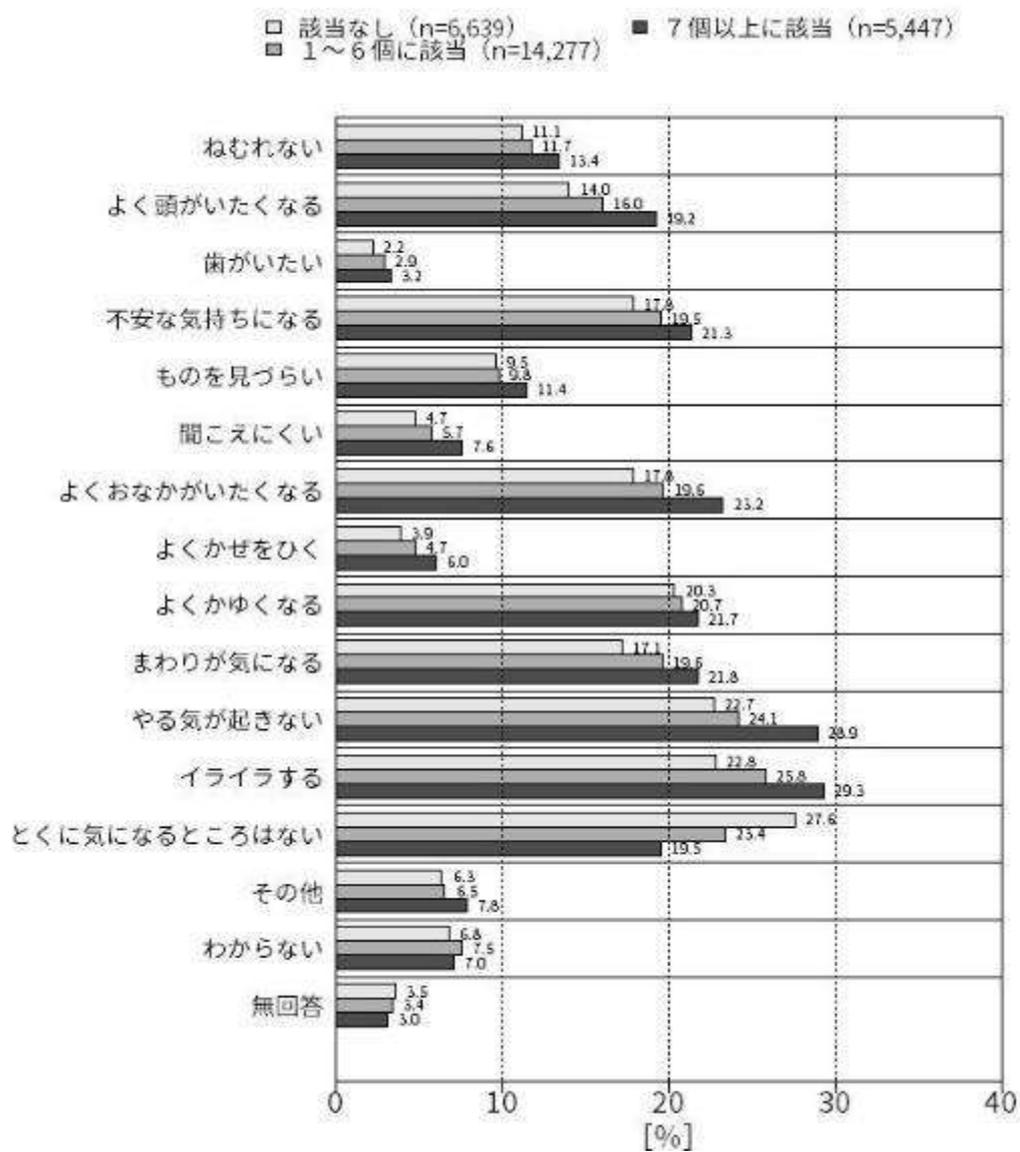
図 192. 困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること

困窮度別に自分の体や気持ちで気になることを見ると、中央値以上群と困窮度 I 群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度 I 群の数値を挙げると、特に高いものは見られなかったが、「やる気が起きない」29.8% (1.2 倍)、「イライラする」27.9% (1.1 倍) など、心理的・精神的症状を示す項目での割合の高さも無視できない。

経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること

(保護者票 問7 × 子ども票 問24)

<大阪市24区>



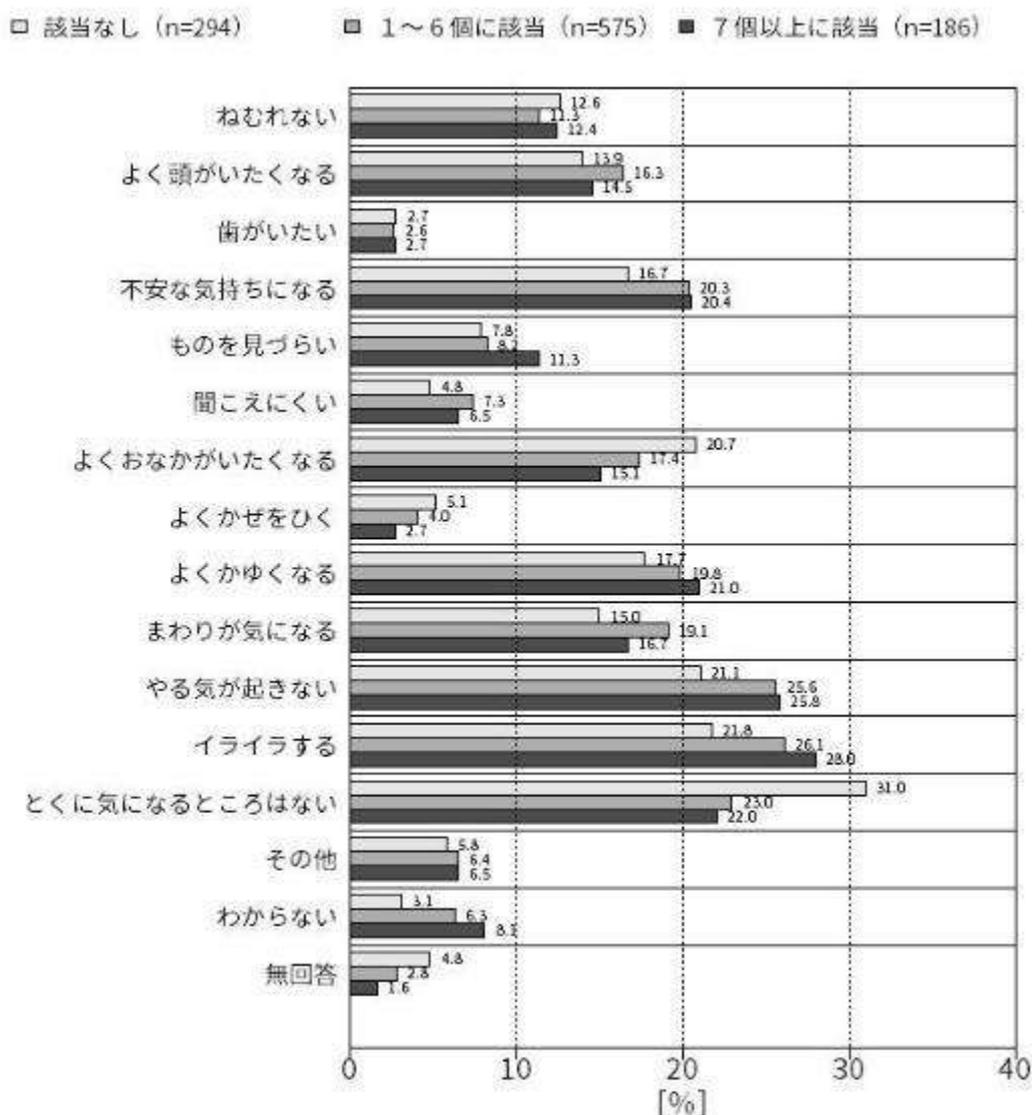
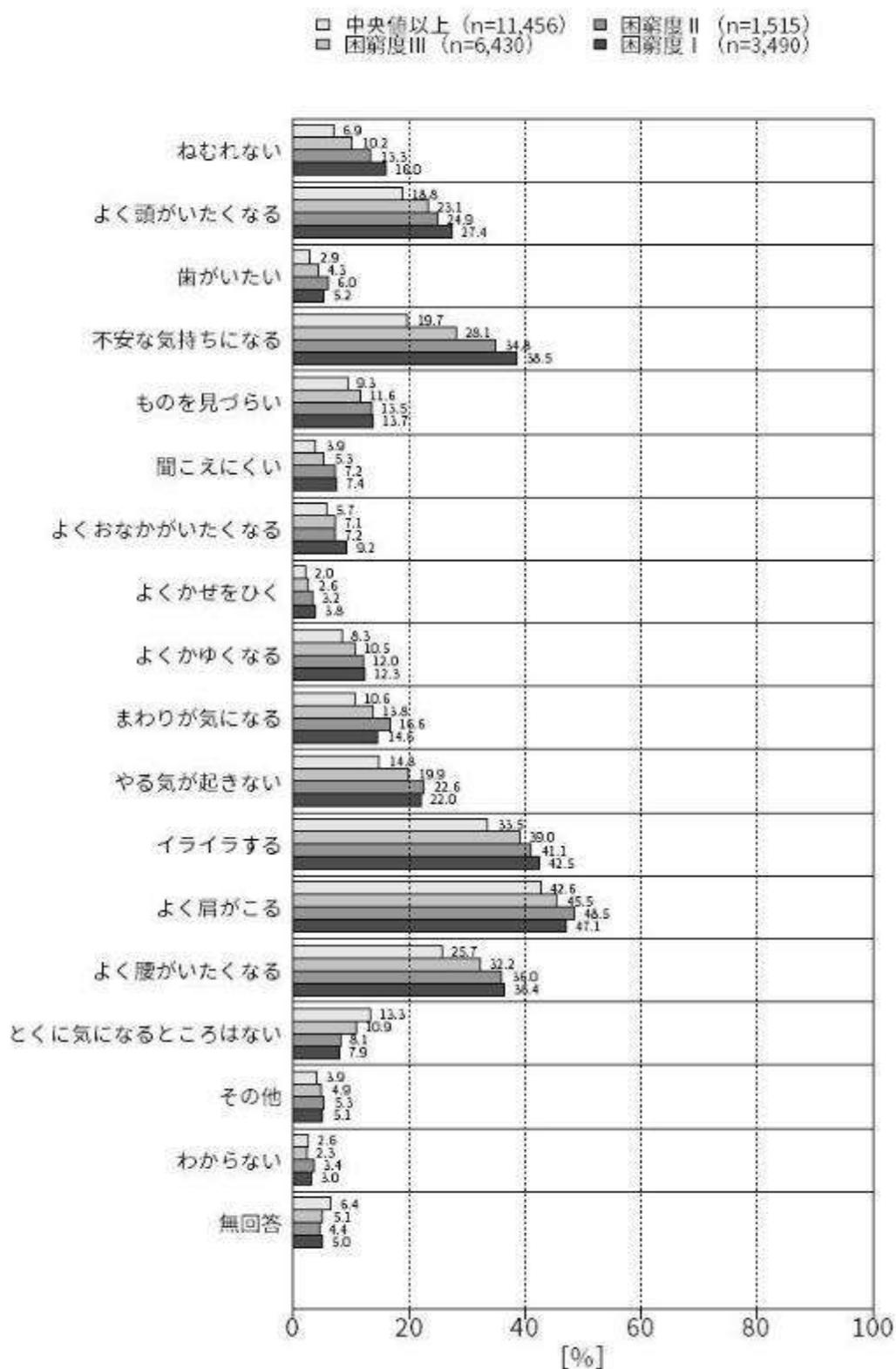


図 193. 経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること

経済的な理由による経験の該当数別に自分の体や気持ちで気になることを見ると、「該当なし」と「7個以上に該当」と回答した人との差が大きい項目に着目しながら、「7個以上該当」群の数値を挙げると、「ものを見づらい」11.3%（「該当なし」に対し1.4倍）、「聞こえにくい」6.5%（1.4倍）、「イライラする」28%（1.3倍）となっている。さらに、「該当なし」と上記の項目ほどの差はないものの、「7個以上に該当」と回答した人では、「やる気が起きない」25.8%（1.2倍）、「不安な気持ちになる」20.4%（1.2倍）、など、ここでも心理的・精神的状況を示す項目での割合の高さが示された

困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること（保護者票 問 26）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

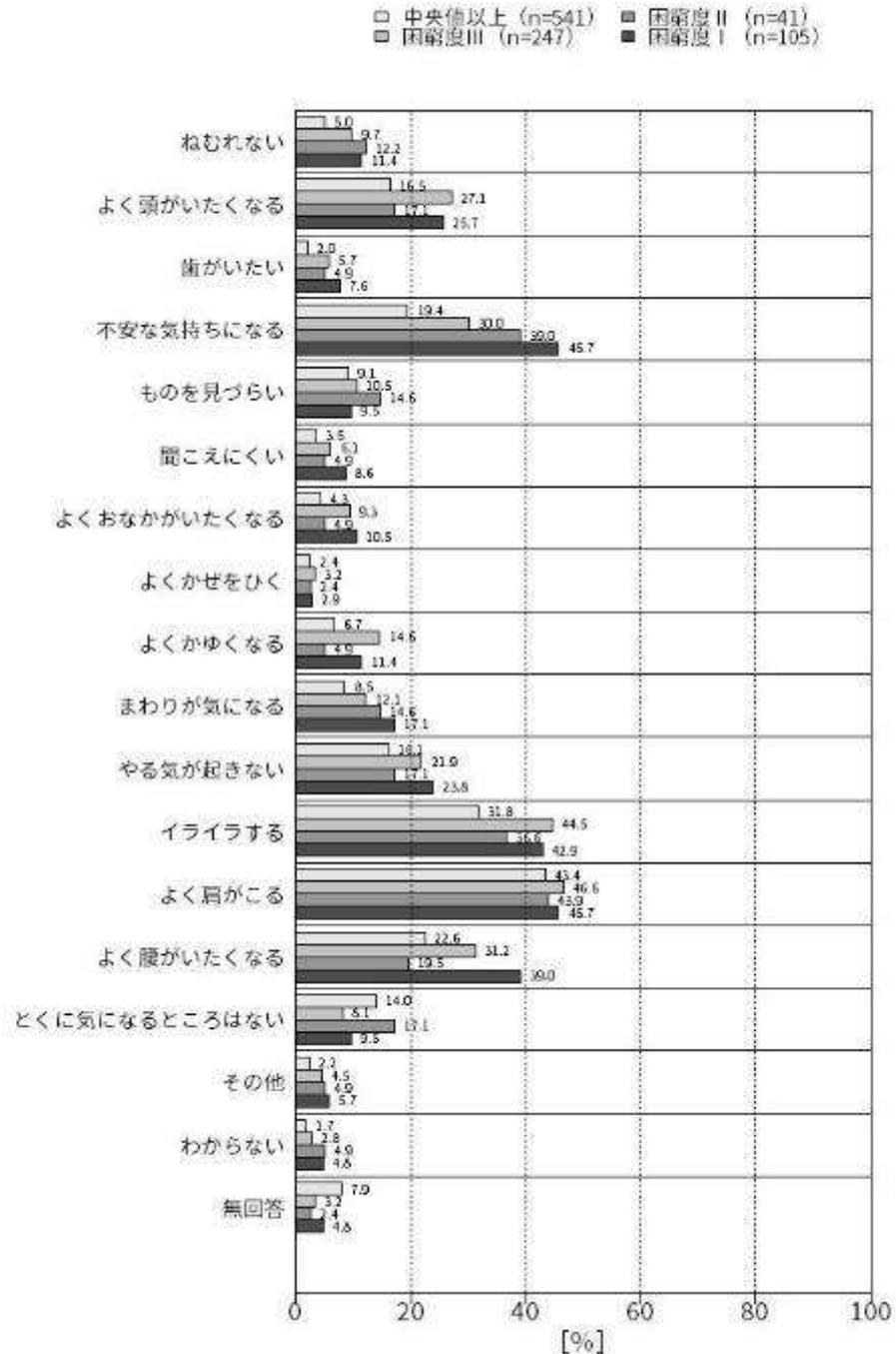


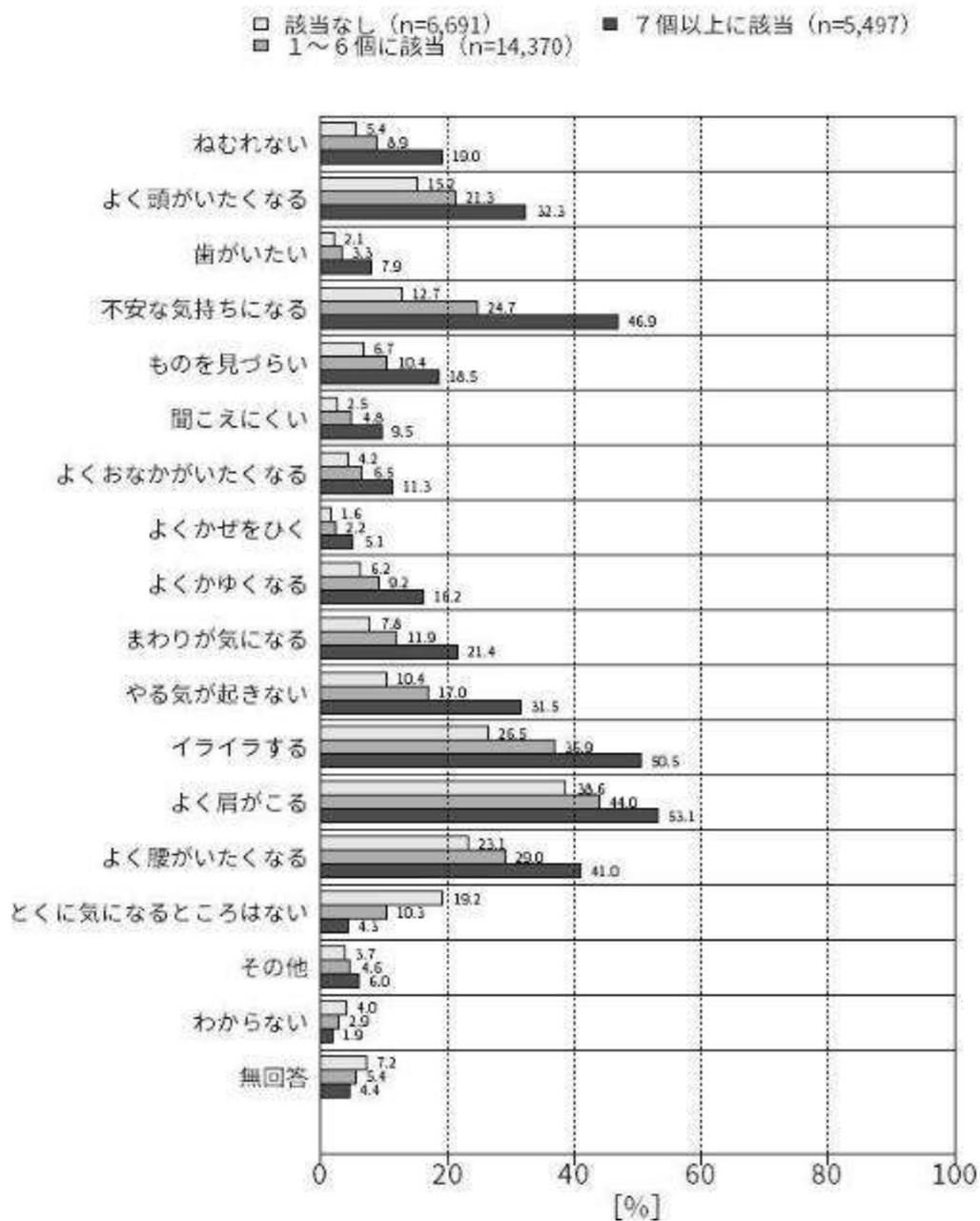
図 194. 困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること

困窮度別に自分の体や気持ちで気になること（保護者）を見ると、多くの項目において、困窮度が高まるにつれ、自分の体や気持ちで気になることのそれぞれの項目が高くなっている。特に困窮度Ⅰ群に着目して、中央値以上群との差が大きい順に挙げると、「歯がいたい」7.6%（中央値以上群に対して、3.8倍）、「聞こえにくい」8.6%（2.5倍）、「よくおなかがいたくなる」10.5%（2.4倍）となっている。つづいて、「不安な気持ちになる」45.7%（2.4倍）、「ねむれない」11.4%（2.3倍）という影響もみられた。

経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること

(保護者票 問7 × 保護者票 問26)

<大阪市24区>



<大阪市都島区>

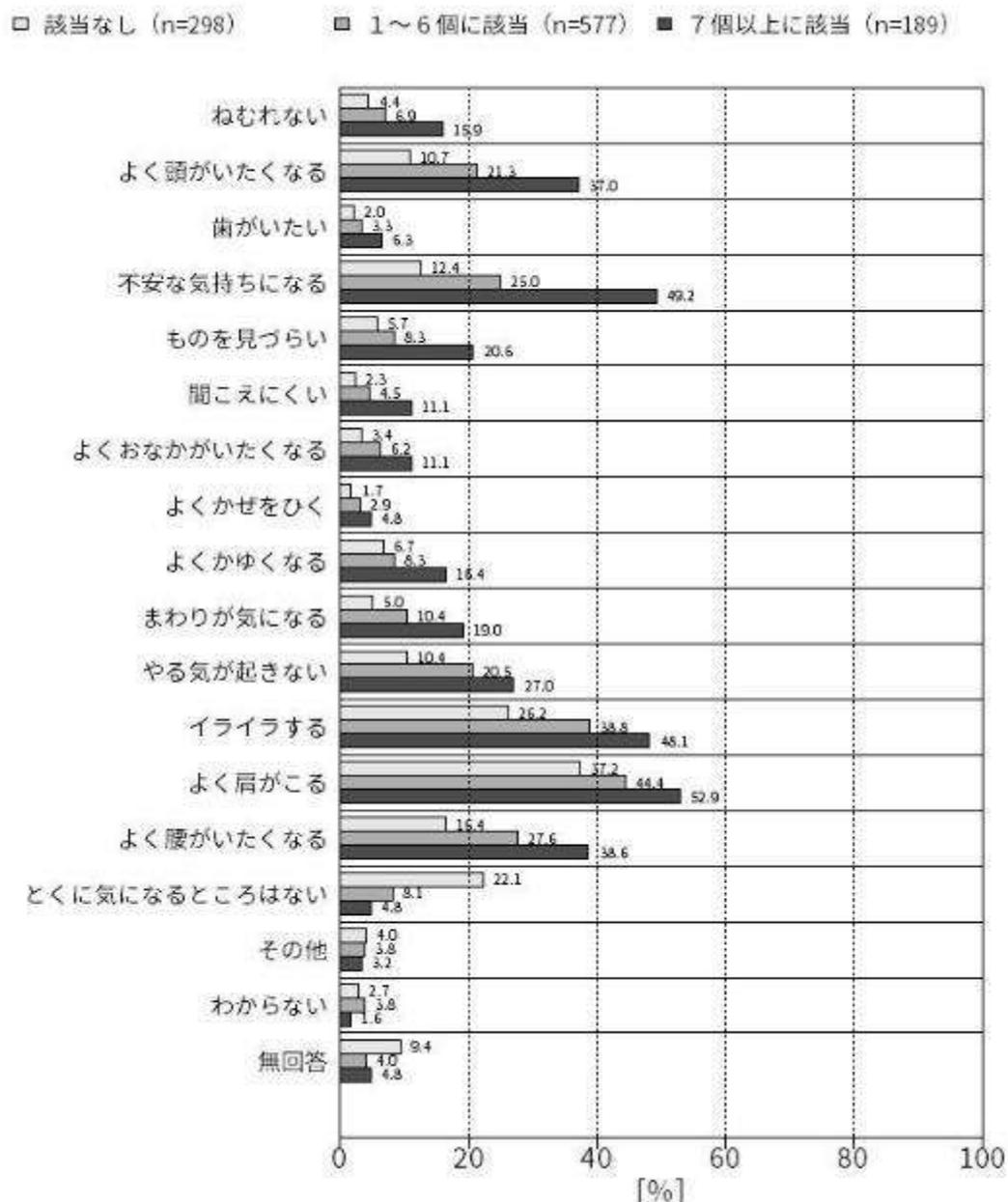
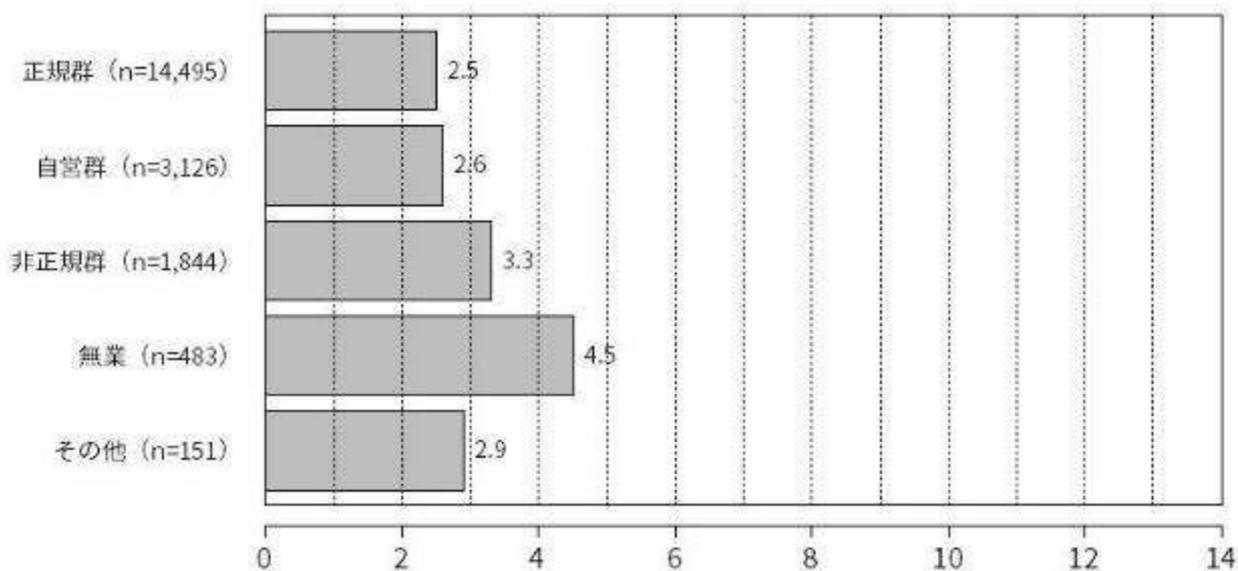


図 195. 経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること

経済的な理由による経験の該当数別に自分の体や気持ちで気になることを見ると、「該当なし」と「7個以上に該当」と回答した人との差が大きい項目に着目しながら、「7個以上該当」群の数値を挙げると、「聞こえにくい」11.1%（「該当なし」に対し4.8倍）、「不安な気持ちになる」49.2%（4倍）、「まわりが気になる」19%（3.8倍）となっている。さらに、「該当なし」と上記の項目ほどの差はないものの、「7個以上に該当」と回答した人では、「イライラする」48.1%（1.8倍）、「やる気が起きない」27%（2.6倍）など、ここでも心理的・精神的状況を示す項目での割合の高さが示された。

就労状況別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当個数（保護者票 問26）

<大阪市24区>



<大阪市都島区>

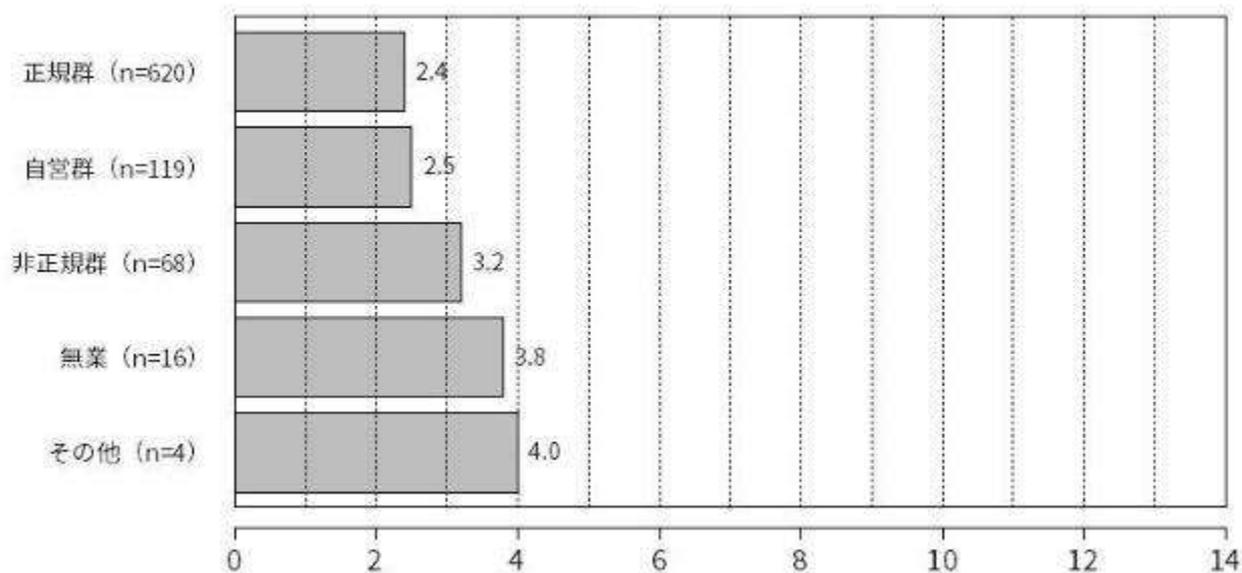


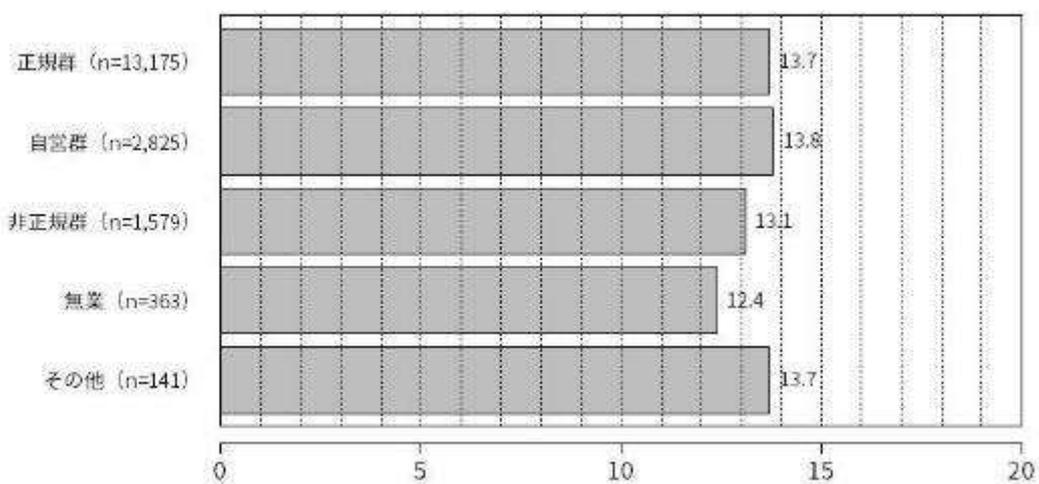
図 196. 就労状況別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当個数

就労状況別に自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、「正規群」では2.4個、「自営業」では2.5個、「非正規群」では3.2個、「無業」群では3.8個である。

就労状況別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー（保護者票 問 29①～⑤）

※成田・下仲・中里他（1995）の特性的自己効力感尺度より「自分が立てた目標や計画はうまくできる自信がある」、「はじめはうまくいかない事でも、できるまでやり続ける」、「人の集まりの中では、うまくふるまえない」、「私は自分から友達を作るのがうまい」、「人生で起きる問題の多くは自分では解決できない」の5項目を抽出して使用した。それぞれの項目について、「そう思う」～「思わない」までの4段階で評価させ、5項目の合計得点を大人のセルフ・エフィカシー得点とした。得点が高いほど、自己効力感（セルフ・エフィカシー）が高いことを表す。

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

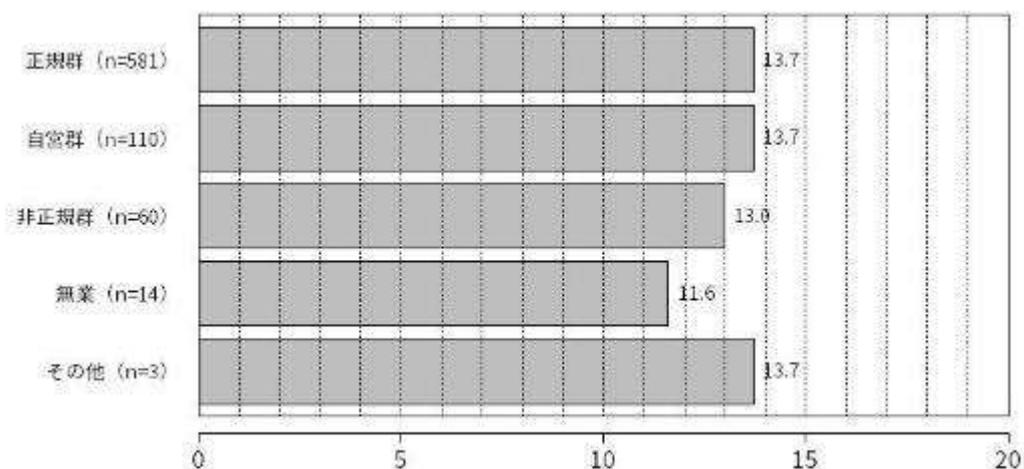


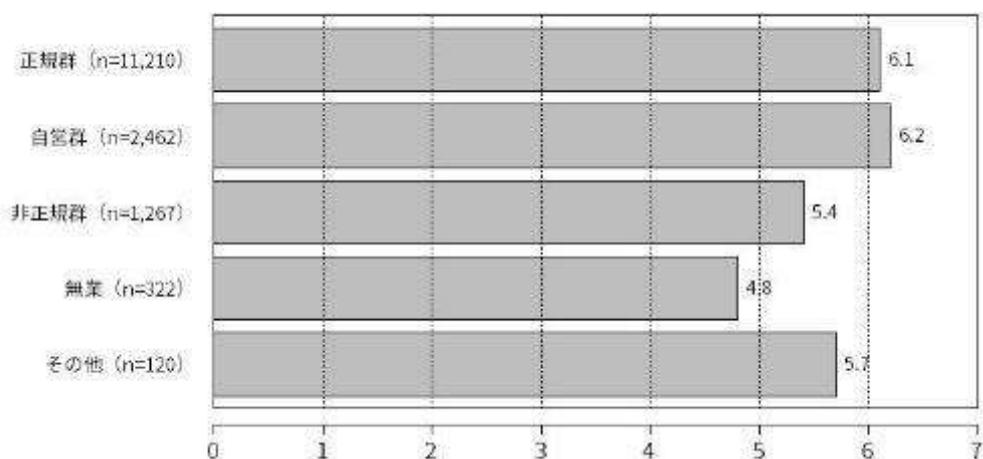
図 197. 就労状況別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー

就労状況別に保護者の自己効力感（セルフ・エフィカシー）を見ると、「正規群」では 13.7 点、「自営業」では 13.7 点、「非正規群」では 13.0 点、「無業」群では 11.6 点であった。

就労状況別に見た、支えてくれる人得点（保護者票 問 23①～⑦）

※「あなたを支え、手伝ってくれる人はいますか」という質問について、「心配ごとや悩みごとを親身になって聞いてくれる人」「あなたの気持ちを察して思いやってくれる人」「趣味や興味のあることを一緒に話して、気分転換させてくれる人」「子どもとの関わりについて、適切な助言をしてくれる人」「子どもの学びや遊びを豊かにする情報を教えてくれる人（運動や文化活動）」「子どもの体調が悪いとき、医療機関に連れて行ってくれる人」「留守を頼める人」の7項目を提示した。それぞれの人物が「いる」か「いない」かで評定させうえて、「いない」を0点、「いる」を1点とし、7項目の合計得点を「支えてくれる人得点」とした。得点が高いほど、身近に支えてくれる人が多く存在することを表す。

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

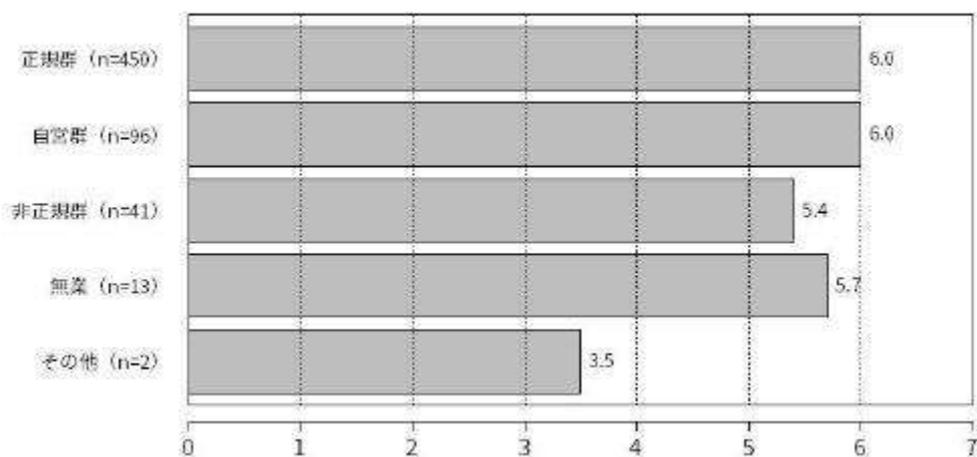
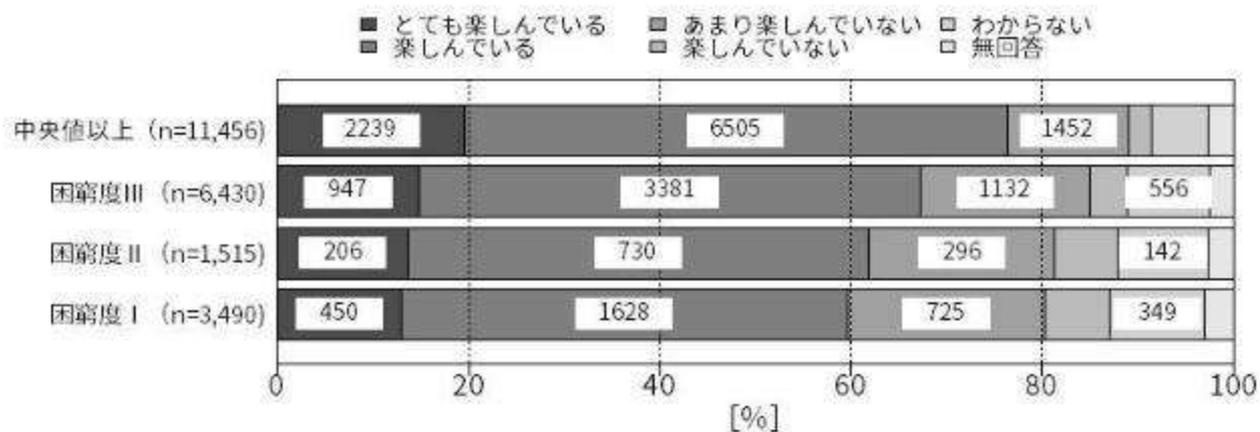


図 198. 就労状況別に見た、支えてくれる人得点

就労状況別に「支えてくれる人」の有無を得点化し、その平均値を見ると、「正規群」では6.0点、「自営群」では6.0点、「非正規群」で5.4点、「無業」で5.7点であった。

困窮度別に見た、心の状態（生活を楽しんでいるか）（保護者票 問 25(1)）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

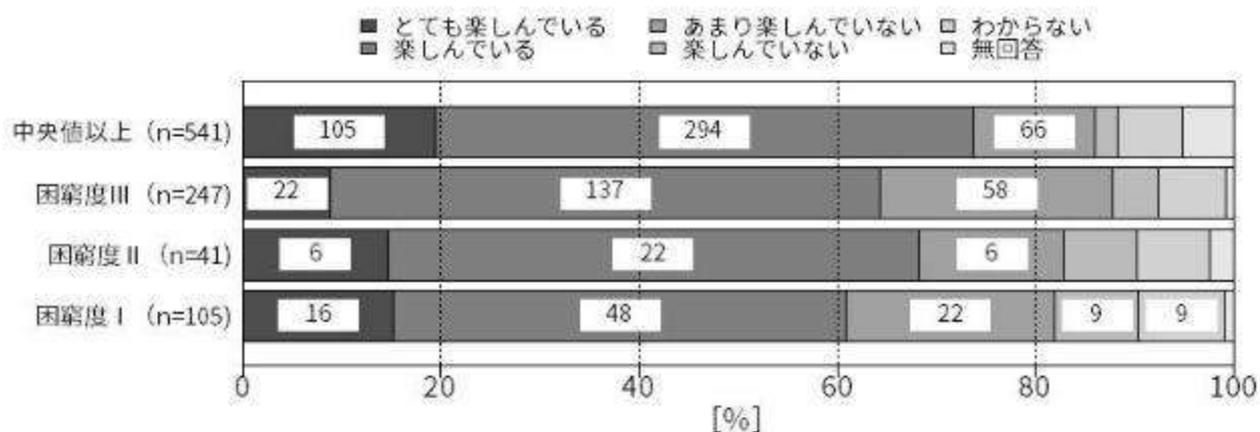
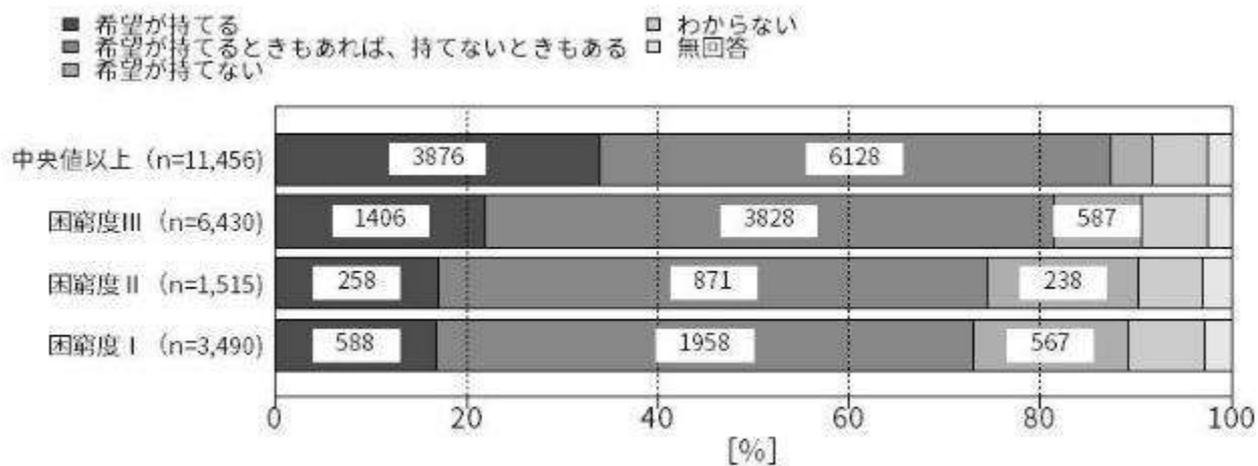


図 199. 困窮度別に見た、心の状態（生活を楽しんでいるか）

困窮度別に生活を楽しんでいるかを見ると、「とても楽しんでいる」「楽しんでいる」をあわせた割合では、中央値以上群が 73.7%であり、困窮度が高まるにつれて、「とても楽しんでいる」と「楽しんでいる」の割合が低くなる傾向にあった。逆に、「楽しんでいない」と回答した割合は、中央値以上群で 2.4%、困窮度Ⅲ群で 4.5%、困窮度Ⅱ群で 7.3%、困窮度Ⅰ群で 8.6%となった。

困窮度別に見た、心の状態（将来への希望）（保護者票 問 25 (2)）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

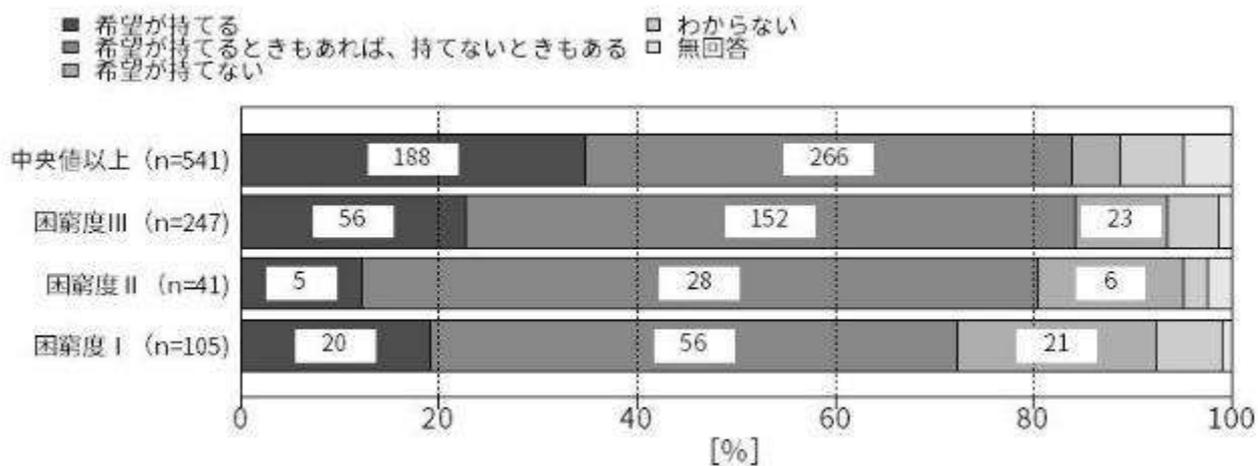
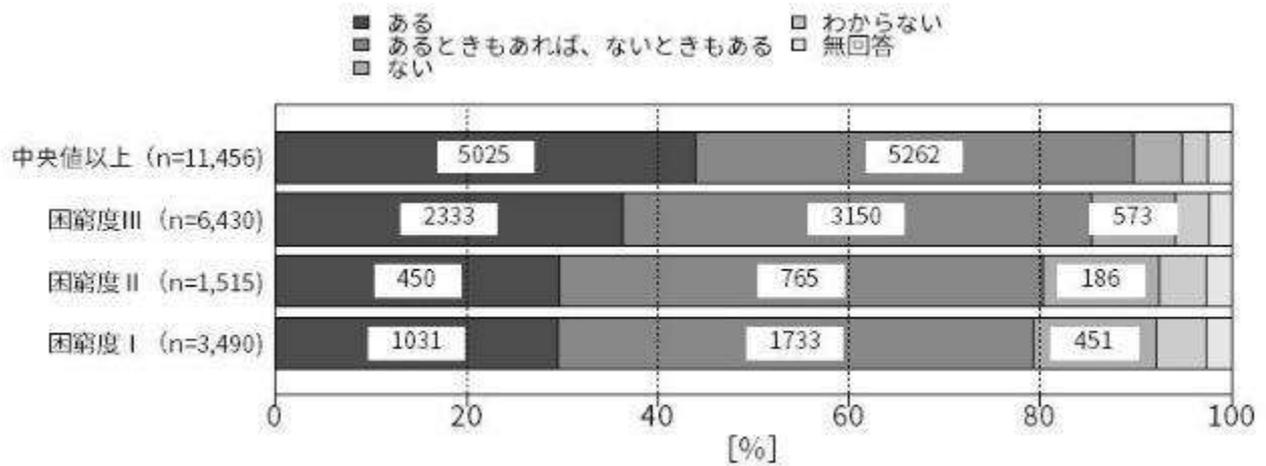


図 200. 困窮度別に見た、心の状態（将来への希望）

困窮度別に将来への希望を見ると、「希望が持てる」と回答する割合は中央値以上群では、34.8%であったのに対し、困窮度Ⅲ群では22.7%、困窮度Ⅱ群では12.2%、困窮度Ⅰ群では、19%という結果となった。

困窮度別に見た、心の状態（ストレス発散できるもの）（保護者票 問 25(3)）

<大阪市 24 区>



<大阪市都島区>

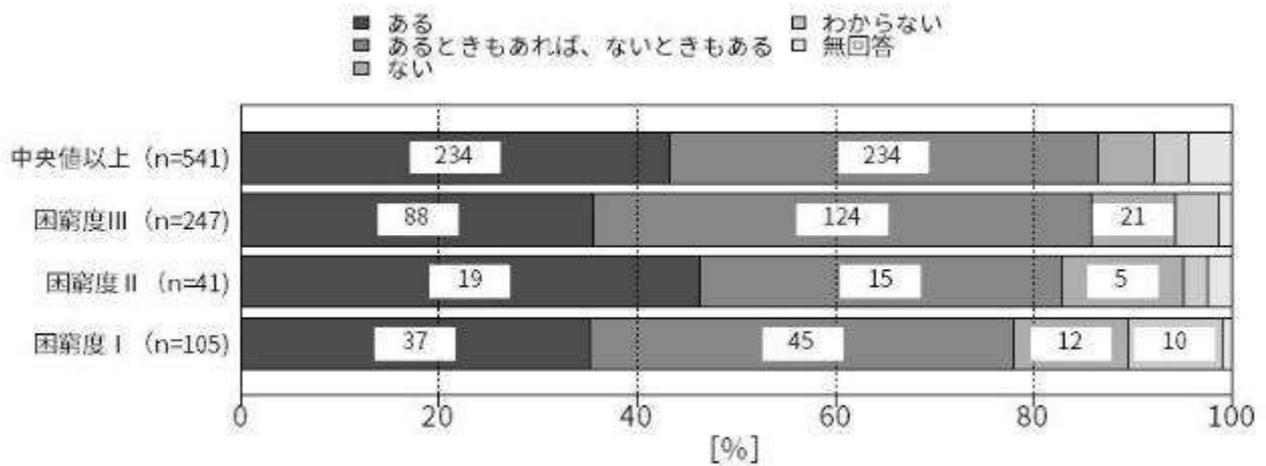


図 201. 困窮度別に見た、心の状態（ストレス発散できるもの）

困窮度別にストレスを発散できるものについて、ストレスが発散できるものが「ない」という回答に着目すると中央値以上群では 5.7%、困窮度Ⅲ群 8.5%、困窮度Ⅱ群 12.2%、困窮度Ⅰ群 11.4%となっている。